

シンタックス博士のピクチャレスク旅行 (Ⅲ - 完). 第二十二曲から第二十六曲

著者 ウィリアム・クーム
訳 江 崎 義 彦

第二十二曲

シンタックスが目覚ませば 時計は五時を打つ。
騒がしい扉が 彼の眠りを打ち砕く。
すると 静かな女性の声が 朝食と
ご主人様がお待ちかねです と告げる。
博士は立ち上がり 表情も晴れやかに 5
心も満たされて 階下へと降りてゆく。
郷士の言葉。「いいですか な あなた様は もう一日
「ここに滞在されて 私とお過ごしになられるよう。
「狩猟の季節も近づいており
「それなりの準備をしなければなりません。 10
「少しだけ 愛犬を運動させ
「小鳥のために 銃の具合も確かめなければ。
「あなた様は 私の平原を散策されて
「私めの荘園に どんな獲物があるか ご覧になってください。」
シンタックスは言う。「残念ですが あなたと過ごす時間は 15
「もう 少しも残されてはいません。
「あなたが 狩猟の腕前を発揮されている頃には
「私は ロンドンの大通りを闊歩しているに違いありません。

「従って 今は 私の感謝の気持ちのみ お受け取りいただきたく
「ひとまずは お別れをしなければなりません。」 20
郷士は答える。「私めに 今言えるのは
「次の機会には もっと長い滞在を ということだけです。」
そう言って 彼は 犬と銃を持って 歩き去った。

シントックスは ゆっくりと また旅を続ける。
そうして 丘の上で あるいは 平野のなかで 25
また 瞑想的な気分に入るのだった。

(シントックス博士の瞑想)

そうなのだ。この新緑豊かな 美しい衣装に身を包む
この偉大なる<自然>に目を向ければ—
夏の黄金と 秋の褐色と
または その華やか色彩を投げ捨てた 30
冬の雪と霜の光景の只中で
変幻自在の薄絹を 自然が纏うとき—
その艶やかな衣装に かくなる魅惑を与えうる
その自然の<力>を愛でずにはおれないのだ。
同時に 無数の形を取って 人目を喜ばせるために 35
いずこともなく立ち上がる その驚異の形姿の数々も
力は弱いとはいえ 誤つことなく 魂を惹きつけ
それが かくなる美を纏っては 全体を装飾するのだ。
<神>の至高の座席の高みと
合流しているかに見える山の頂き 40
守護者よろしく誇らかに谷間を守る 岩々
しばしば 壮麗な騒乱を起こして打ち寄せる
大洋の潮の流れの その境界線など すべてが

世界を構成する 諸々の断片のようにぞ 思われる。
他方で 低い丘と その間に横たわる谷間も 45
風景に 多様性を与えているようだ。
また 控えめな小さき物たちも 手招きをして
美しい<自然>の変幻極まりなき表情を 指し示す。
慎ましい藪も 枝葉を広げる一本の樹木も
同じ原理に服しているのだ。 50
地面には 黄イチゴの茂みが這っており
壁のてっぺんには ヒソップの花がそびえたつ。
昔の群生箇所には 蒲^{がま}が踊りたち
生垣には 野生のバラが咲き誇る。
そして 種々の色を持つ花々は 55
その苗床から 芳香を注ぎ出す。
小川は 谷間や 垂れ下がる樹木や
森の木陰の中を 湾曲して流れ
その大胆に流れ進む波は
生き物が群れ集う岸辺を 舐めるかのごとく進みゆく。 60
そうして その勢いを増しながら
その白波が 大地の緑と合流するのが見られる。
いいや それだけにはあらず。 何と変化に富んでいることぞ
大空を切り裂く者 海を掠めて飛ぶ者
平野を闊歩し また 頂きから 65
下方の谷間を見下ろすものたちは。
白鳥の白さよ 孔雀の虹色よ
鳩の首よ 鷺の目よ。
また 森の音楽を作り出す者たちも
その歩きぶりは 等しく美しい。 70
抵抗する者なき 象^{ぞう}の力強さ
馬の馬力と その心

オコジヨの柔らかさ 逆立つ剛毛に

全身を覆われた ^{いのしし}猪よ。

かくなる状態で 生命あるもの 無きものを問わず

75

<自然>の様々な状態を通して

凡ゆる異なった階級のなかに

果てしない多様性を 人間は見るのだ。

この 天の下の 神秘溢れる世界になかに

何という快活な変化を 我らは目撃することぞ。

80

植物的な成長をしているもののなかに

本能が育ち それが運動を与えているのだ。

しかし <自然>の書物の最初のページを眺めわたし

半ば靈感を受けて 人間なるものの広大な多様性を

調査するよう 示唆されるならば

85

これまで述べた諸々の事物も ささやかなものに過ぎない。

このように 深い形而上学的な気分のなかで

シンタクスが 近道を探して 道を辿っていると

多くの学説が 彼の豊かな学識のなかで成熟するよう

自ずから溢れては 流れ込んでくる始末であった。

90

しかし 哀れな人間的な本性の味方とならないような

そのような傾向を示す学説は何一つ沸き上がらなかった。

そう すべてが 人間の社会的な愛を固く支える証拠となる

そのような証拠を示すべく 適切に形成されていた。

このようにして 彼は うっとりとした感情を抱き

95

その日の経過をも忘れて 道を歩んで行った。

そして このように一心不乱に瞑想に耽っていたがゆえに 彼が

愛馬に餌を与えるのを忘れていたのも 無理からぬことだった。

そして 以下のような事態に落ち入ったのも 自然のことだった。

グリズルが 小さな草地を発見したときに

100

彼は ほぐし難い難問の行く末を考えこんでいて
彼女が 立ち止まっては 少しだけ
草を齧^{かじ}りとったのに 気づかなかった。
また 彼らが 透明に澄んだ流れを通り過ぎるときに
彼女が たっぷりと 水を飲んだことをー 105
また 偶然に 路上において
豊かに干し草が積まれた荷車に出くわしたとき
彼女がグズグズしては その食物の先端を食いちぎり
ちゃっかりと貢物に預かったことなどを。

しかし 今や トランペットの勇ましい響きが 110
その深い夢想から シントックスを目覚めさせた。
そこで グリズルは楽しそうに尾を振り 前足を幾度も跳ね上げては
門のところまで 一気に突き進んだ。
そこには 豪華な毛織物の帽子を被って
宣戦布告を告げるトランペット吹きが立っていた 115
その顔は 頭上に宙吊りになって垂れ下がる
あの年老いた赤い「ライオン」のようであった。
彼は宣言する。「おお 私は 再び
「グリズルの立髪を見ていると 誓ってもよい。
「彼女が 私と共にいて 戦争で受けた 120
「その同じ傷痕によって 彼女がよく分かる。
「彼女は 私がその背中に乗ってラッパを吹いていた時に
「あの 怒れる一撃を受けたのだった。
「激怒した軽騎兵が 突き進んでやってきて
「私を打ち付けたけれど 彼は仕損じた。 125
「私の哀れな牝馬が その一撃を受け取って
「直ちに 溢れるような血が 彼女の身体から流れ出した。
「そうなのだ 同じ剣が 我が兜を打ち砕いた時に

「我が勇敢なる戦友 スティーヴン・ブラウンが馳せ参じ
 「そのフランス人を 切り倒した。 130
 「私は 同じ灰色の馬で 荒々しい日々を
 「血まみれの多くの日々を 運ばれ続けたものだった。
 「彼女の耳は 勇敢なるあの調べを 十分に覚えているだろう。
 「再び 彼女に会えて 嬉しいこと この上もないわ。」

「それはよろしゅうござるな。しかしですな この子の耳は 135
 「邪悪な道化師ごときの地獄の鎌が 切り落とし」シンタックスは
 笑いながら言う。「彼女の頭の 美しい誇りを
 「奪い去ってしまったのですわ。
 「また 似たような運命から 彼女の尻尾を救うべく
 「優しい ささやかな思いやりとて 与えられなかったのですぞ。」 140
 そうして 彼は 愛馬の過去の不幸と
 現在の状態を 詳しく語り続けた。
 そうして トランペット吹きに 溢れる酒盃と
 昨夜の馳走を 共にするよう 求めた。

シンタックスは 座席につくと イングランドの歴史について 145
 兵士が語る物語に 耳を傾ける。
 いかに イギリスの縦列軍が 戦い抜き
 敵どもを追い払い 戦争に勝ったかを。
 いかに しばしば 己れの息を弾ませて
 武装への呼びかけをし また 突撃ラッパを吹いたのかを。 150
 同時に 彼は 多くの勲功を呼び招いたとはいえ
 退却のラッパを吹いたことなど 一度もなかったと。
 今尚 彼は 慎ましい声音ながら 誇張した話しぶりである。
 というのも イングランドの栄光は 彼の栄光でもあったのだから。

- 「(それ自身で 栄光ある一日を 確実に約束する) 155
「輝かしい隊列のなかに 私は 見てきました
「生彩ある軍列が 彼らの的に遭遇しては
「敵を 足元に平伏させたことを。
「そうして 私のトランペットが 進軍し
「征服するよう 吹き鳴らされたとき そして 160
「直ちに 彼らが 輝く刃を 展示して
「勝利の進軍を 果たした時に
「私は 筆舌に尽くしがたい そしていかなる陰気な顔の危険さえも
「味わうことなど出来ない そんな喜びを感じました。
「もしも あなたが跨っておられた同じグリズルが 165
「話すことが出来るならば 彼女が歩んだ地面は おお 悲しいかな！
「しばしば 一面 殺害された兵士たちと
「凝固した血糊で覆われていたと 語ることでしょう。
「辛うじて難を逃れた兵士たちを どれほど見てきましたことか。
「どれほど多くの危難に 私も 遭遇したことか。 170
「そして やがて また 我らの故国からの命令で
「外国の土地を踏み 戦乱の危険と
「騒音とに 共に預かるべき
「そのような時が 来ないとも限りません。
「なにはともあれ 敵と出会うような場所にはどこにでも 175



「出かける準備は 私にはできている積りです。

「そして 死ぬことが 私の運命ではあっても

「泣いてくれる妻も赤子も 私にはいません。

「いかなる血痕の海に私が倒れようとも

「そこに トーマス・ホールの終焉があるわけです。」

180

シンタックスが言葉を継ぐ。「おお 我が友よ

「我らの終焉に出くわすべく 準備するのは良いことですぞ。

「そうするべく 私は 説教するという役目を負わされています。

「説教するというのが 私の大事な仕事です。

「しかし 今 私の心は 遥かに異なる種類の思いに

「囚われては 不安な気持ちで一杯なのです。

「現在の忙しげな時間も 必ずや

「私の財布と名声に 注意するよう呼びかけるでしょう。

「私の愛馬を ロンドンの人々に見せるのは

「冗談の種になること 承知の上ですので

「可愛そうだが グリズルをここに残し

「さる荷馬車か郵便馬車に依頼して

「私の鞆と私自身を 先の旅へと運んで頂くー

「今 そんな考えを思いついた訳でした。

「恐らくは 旧知の間柄であるあなた様ゆえに

「私の哀れな馬を あなたのご配慮に委ねさせていたこうか と。」

「もしそうでしたら」と トランペット吹きは答える。

「それは 私の名誉であり誇りとなるでしょう。

「あなた様には 神のご加護がありますよう。ご心配めさるな。

「あなたの馬は ここで十分に 保護して差し上げます。

「あなたがお戻りになる時は 旧友の私めが

有難いおもてなしをしてくれたと

「彼女の表情が そのことを 十分に語ってくれるでしょう。」

185

190

195

200

角笛の響きが 便利で 迅速な四輪馬車の
近い接近を 告げていた。
やがて 四頭だての馬車が 205
「赤獅子」亭の扉の前に 現れた。
自らの場所へと 博士は飛び乗る
御者が鞭打つと 一行は飛び跳ねて進んでゆく。
周囲の雰囲気は 誠に心休ませるものであり
乗客はすべて うたた寝をしていた。 210
そこで 真実を言えば 彼も 瞼を閉ざし
休息するのが最善だと考えた。
夜が明けたとき 彼が 休らう仲間たちに
目を向けた時に 彼が見た者たちは
鼻息も荒く 麩をかいている赤ら顔の男と 215
両目を歪めている 貴婦人と
人生がわずか 16年という華やかな
快活な風采の 若い乙女であった。
突然馬車が大きく揺れて 彼らの眠りを妨害した。
彼らは 皆 仰天し すっかり目を覚ましてしまった。 220
海軍新兵が 大きな欠伸をし 話しだした。
「我々は 忌々しくも 緩やかにうごいているのですな」
「ああ」乙女が言う。「何て早く動いて行くのでしょうか！」
他方で 貴婦人は クスクスと笑いながら
「これって 中程の速度でしょうね」と宣言する。 225
「牧師さまは どうお考えですか。」「同意しますよ。」
シントックスも 笑いながら言う。「三人の方と一緒に
「丘を登るときには 速度は かなり緩やかで
「下る時には 何と愉快地に進みゆくことでしょう。
「しかし 上りでも下りでもないときには 230
「中程の速度に間違いはないでしょう。」

乙女が叫ぶ。「ああ 素敵なお考えですこと！」

赤ら顔が唸る。「然り！まさに知恵のカタマリ」

貴婦人が言う。「このお方のご気質を

「私が 透視出来ますならば

235

「きっとユーモアを発散することを 愛される

「そのような御仁のお一人に 間違いありませんね。

「そして 古臭くなったトンチでさえも 話の仲間に加わる人たちには

「生彩あるものすることが お出来になるお方。

「でも 私たち この乗合馬車に乗って旅をし

240

「自身の四頭立て馬車を 家に残している 私たちは

「旅をすることを定められた人達と このようにお話をする時にこそ

「有難いめぐり合わせとして 生まれてきたことに感謝すべきですわ。

「いいですか 私の姪子 あなたがいつもそうしているように

「どこの誰かも分からない 多くの人達と

245

「軽率なお喋りをしたり やたらとべちゃくちゃ喋ったりすることは

「とんでもない間違いなのですからね。」

新兵は 向きを変えると やがて優しい眠りが

彼の全身に 忍び込み始めた。

そこで シンタックスは 己れの未来の<書物>の胎児を

250

そこで 観察しようと考えた。

このようにして すべてが静寂のままにて そのうち 遂に

彼らは ロンドンと呼ばれる大きな街へと辿り着く。

さてさて 我らが聖者は 賢明にも考えた－

旅籠の周囲で耳にする町の騒音は

255

己れの研究の時間の邪魔になる－

また 自分の書物を パタノスター大通りの名士たちに

見せるに相応しいものにするための

知的な奮闘をも 無駄にする と。

そして 北部地方の守護者として 260

その持ち前の良識と財産ゆえに信望厚き貴族が

「町へおいでの節はいつでも 私の屋敷を

「あなたご自身の家になさってください」と申し出たものだから

博士は 己れの運命を試す決意をして

当の<閣下>の門を叩くに至った。 265

そして その同じ門のところに やがて彼が現れる

<我が閣下!>と 博士は微笑みを浮かべて 挨拶を送る。

「よくぞ参られました 我が学識深き親友よ

「早々に こちらへとお足を向けられたとは。

「私は 仕事で この町にやってくる訳でして 270

「このように一人の私と あなたはお会いになられるのです。

「あなたの愉快的旅の仕上げをなさるために

「どうぞ ここにテントを張られて 時間をお過ごしなされよ。

「そして その仕事が果たされたならば 私もご計画のお手伝いをして
差し上げます。

「決して それを 空なる夢に終わらせなさいませぬよう。」 275

博士は <我が閣下>の善意を 目を潤ませながら

しかし 顔には微笑みを浮かべて 受け入れた。

そうして10日間 朝も夜も

己れの書物が日の目を見るよう 精を出した。

他方で その間をぬったわずかばかりの休憩時には 280

酒と花々で 陽気な気分にも浸される時もあった。

<我が閣下>は 寛大なる熱き友情に動かされて

今や 博士の書物を読み それを好ましく思った。

彼は言う。「あなたの気をそぐつもりで

「愚かにも 愚見を申し上げる とは思われないよう。 285

「私が真摯な男であること そのことはご理解頂けているとして

「どうぞ お気になされずに ご著書を

「私めにご献呈頂けるとしたら 光栄に思います。

「それが全てでもありませぬ。私は

「我が この愉快的な 学識深き親友を 290

「この手の道における 誰よりも寛大な感情の持ち主に

「推薦しても差し上げましょうぞ。

「私のこの手紙を あなたが提示なさるだけで

「その彼は その作品を受け取って 満足するでしょう。

「こうして 善良なるあなたよ 私は私の最善を尽くします。 295

「どうか彼に遭われてください。あとは あなたのご説明次第です。」

博士は 殆ど飛び跳ねんばかりに 内心喜んで
早速 彼の書類を受け取った。

また ぐずぐずいる訳にもゆかず

見世物が満載された領域にゆくのではなく 300

<パタノスター大通り>に行くのであった。

その店に入り 見回せば

書物が溢れんばかりの書棚を目撃する。

ロシアとモロッコ仕立ての書物である。

すっかり満悦したシンタックスは 305

その文学的な光景の背後を覗き見た。

「さあ ご主人を呼んできてくだされ」彼は

仕事に専心している店員に呼びかけた。

「D・Dなるもの ここにあり と伝えてくだされ。」

すると若者は 冷笑を浮かべて こう答える。 310

「D・Dなる得体の知れぬ者のところには、主人は来ないでしょう。」

「オックスフォードやケンブリッジ大学の知識があっても

「そのような人のところには来ませんよ。

「それに 私は罪人なので 主人のところへ行くことは出来ないのです。

「夕食を邪魔することになるといけませんからね。 315

「どれほど私が非難されるか ご想像もつかないでしょうね。」

地団駄を踏みながら シントックスは大声をあげた。

「アポロと9人の詩の女神さまよ!

「学問は 商売人が夕食をしている間は 待っておかねばならないのか?」

「彼らは普通の三文文士たちです」少年は答える。 320

「そのような連中を 我々は 雇いはしません。

「私も 彼らの名前は耳にしますが 私に分かっていることは

「彼らは 滅多に この<大通り>にはやってこないということです。」

店の裏の方の 小綺麗な部屋で

食事に与っていた その主人は 325

大きな怒鳴るような声を耳にするや否や

その訳を知りたくて 店へと顔を出した。

そして 妻とウイスキー・ボトルをも 置き去りにして

この異様な騒ぎを 知ろうと望んだ。



彼は そのふくよかな腹が

330

牛肉と ハムと 腿肉で 出来た男だった。

そして シンタックスの 哀れな
やせ細った姿を見て 彼は怒鳴り始めた。

書店主

「旦那 一体どういう訳か知りたいものですな。
「このような 大騒ぎを引き起こされて。旦那。 335
「あなたは どなた様で お名前は？
「そして ご用向きは 一体何でしょうか。」

シンタックス

「どうか 注意深く そして慎重に この<書物>に
「目を通して頂きたい それが私の要件ですが・・・
「そして それを買うか プリントするか 340
「また 出版するか 判断していただきたい。
「この作品が 描き出す主題は
「<芸術と自然>の美しき領域です。
「好奇心あるものの心を 誘惑するような体裁になっています。
「要するに ご主人様 それは<旅行記>なのです。 345
「すべて 自然から作り出された素描もついており
「また 並々ならぬ技倆でもって描かれてもいるものです。
「家々や 名高い場所 湖 そして木々のすべてが
「この私の手で描かれ この目が見たものたちなのです。」

書店主

「なる程 旅行ですな。私は 聞き飽きています 350
「旅行記や それに類した粗雑極まりなきモノたちには
「(私は 商売の言葉を使いますが)
「何と愚かな取引を あなたは考えておられるのか。
「国中を旅行した挙句

「以前に書かれたものを 更を書くだなどと。 355
「どうか しかめ顔なされぬよう。その当の場所を見てもいない者たちから
「我々は<旅行>を手に入れることが出来るだなどと。
「私は 自由気ままに 旅行記なる書物を作る
「そのような技術を持った男を知っています。
「ムアフィールドの彼の屋根裏部屋には 360
「凡ゆる国を生み出すような そんな代物がワンサとあるのですぞ。
「それゆえ どうぞ 今日はお引き下がりください。
「そして その書物は 暖炉にでも投げ捨てなされよ。
「そして どうぞ怒りもせず また悲しんだりもされぬよう。
「ともかく 紙くずとなすために その書物
買うわけにもゆかないのです。」 365

シントックス

「このボンクラめが。あなたは その人たちのおかげで
「飲み食いが出来るのに その人たちをこのように取り扱うのですかな。
「あなたが知らなければ 私が教えて進ぜよう。
「あなたの巨大なお腹を満たすのは 彼らなのですぞ。
「そう この馬鹿者め。私の頭蓋のような頭蓋骨から 370
「あなたは スープを啜り 酒を飲めるのですぞ。
「しかも 金銭的なものに関係するもの以外には
「理性の感覚のカケラも示すこともなしに。
「こうして 善と悪が全体を構成する
「天は あなたに富を 私には魂を与えてくださった。 375
「私は あなたの金銭を あなたの黄金を 求めるような
「愚かな人間には 決してなりたいとは思わない。
「もし 慎ましい著者が (まさに あなたを太らせている輩が)
「嘆願して あなたのもとへと やってきたならば
「あなたは 己れの傍らに ユノをはべらせて 380

「誇りに満ちたジュピターのように感じることであろうな。」

書店主

「これは不屈き千万。私の最愛の妻の汚れなき名前を

「よくも そんな風に中傷なされるとは。

「そう 彼女は私の妻です。10年前に

「牧師さんが <大通り>で我らの手を結び合わせてくださった。 385

「彼女は この<大通り>の まさに<花>なのですぞ。

「あなたがおっしゃるユノ嬢とは 売春婦です。

「あなた この口汚い 悪賢い悪党め!

「この街をぶらつく放蕩息子なら 誰でも知っている

「正真証明の 名高い売春婦なのだ。 390

「最初に 下僕と駆け落ちし

「今は 町会議員と暮らしをしておる。」

シンタックス

「ほんに やれやれ ですな。ところで この手紙読んでみなされ。

「そしたら もっとマシな風に 私に対処できなさるハズですが。」

書店主

「これは失礼しましたな。最初の手紙を見せてくださっていたら 395

「あなた様の学識深い耳が 聞くべきではなかったような

「そんな言葉を私が言う前に

「まさに 私のこの太鼓腹が 破裂していたことでしょう。

「でも 私たちの住んでいるこの世では

「許しあうことが肝心なのですよね。どうぞ ご容赦を。 400

「時としては 最も打ち解けた寛大な心からでさえも

「このような些細な熱は 飛び出して来るものですな。

「我が閣下は あなた様のお人柄を高く評価されています。

「あなたが受け継がれている そのご才能についても同じですが。
「また 閣下は 自分ご自身のことをも 美しく書かれております。 405
「そして 閣下の作品は魅惑的なものでして 売れ行きも上々です。
「さてさて どうぞ ワインを飲み干して下さい。
「夕食の準備も やがて整うハズです。
「今のところ 熱い食べ物もなく 心苦しいのですが。
「おおい お前 何かポットに入れておくれでないか。 410
「なあーに すぐに準備も整うでしょう。それから ナンシーに
「フライパンで カツレツを焼くよう 伝えましょう。
「この手紙によれば 閣下は 明白に あなた様の作品は
「最高の賛辞を送ったところで 遥かにそれを凌ぐと書いておられます。
「そして 印刷をすぐに始めるよう 望んでもおられますし 415
「費用については 自分で何とかするだろう言っておられます。
「その書物は 必ずや売れること 信じて疑いません。
「そして それを世に出すことについては 私は労苦を厭わないつもりです。
「このような質の書物は 出し惜しみしてはなりませんね。
「初めに2千部ほど 印刷させましょうか。 420
「そして あなた様がお望みであれば・・・」

シntax

「いえ ご厄介になる時間はありません。
「そのことについては また別の日に 話し合いますよ。
「ここにやってくる前に 私は 閣下と
「今日の夕食を共にする約束をしてきました。」

書店主

「では いくつか必ず あなたが再訪なされることを信じて。 425
「そのときは 閣下も ここで夕食をなされるでしょう。
「実際に 真の友人同士が ささやかな食事を共にするなど

「本当に素晴らしひと時になるでしょうね。

「その間は どうぞ 凡ゆる意味において

「私の心と手は あなたの意のままになさってください。」

430

このように（また それがこの世の いわば雑然とした
成り行きなのだが）

彼らは 敵として出会い 友人として別れたのであった。

第二十三曲

「天分であれ 功德であれ 苦勞して育つ子供が

「遺産として受け継ぐ物は 何であれ

「この死すべき人間の現状では 彼に富を齎すことはおろか

「彼を 偉大なる人間にする保証など どこにもない。

「たまたま 異教徒の詩人たちが<幸運>と名付ける

5

「あの不思議な あの気まぐれな婦人が

「目には見えないが 常に力を発揮しながら

「この子の疲れさす日々を 慈悲深く 救済するだけなのだ。

「私は 生涯 辛苦艱難の道を歩んできた。

「そして このちっぽけな報酬とは 一体何だったのか。

10

「精読に精読を重ねて アテネの古典的な 澄んだ知恵で名高い

「太古の賢者たちの書いたものを一

「また 他方で ローマ人の雄弁なる調べを

「満載した 豊かな書物の数々を一

「ことごとく読み漁って来たのだが

15

「その勉強一筋が 一体 何を私に齎してくれたというのか。

「愛顧を賜るべきパトロンさえ 私は持たない

「持つものは ただ 薬缶を沸かす程度の人達だけだ。

「労働し苦悩しながら ヘブライ語の語源を知り
「また <創世記>から<マラキ書>までの中に隠された 20
「秘められた真理を解き明かすことが出来る力はあるのに
「それが一体 何だというのだろうか。
「私は 自分が養ってきた羊の
「その毛さえ 刈るようなことは 命じられていない。
「そう それらの羊毛は 当の羊の群れを一度でさえ 25
「ことのない 怠惰な愚鈍者を 肥やしている始末なのだ。
「私はと言えば 彼らの週ごとの食事を賄うために
「なけなしの収入を蓄えながら 卑しくも不平をかこつ次第なのだ。
「私は この目と蠟燭の端っこを浪費するばかりで
「真の友人を一人でも持ったことはあったか? 30
「更には それなりの腕のいい音楽家であるのに
「このヴァイオリンが 一体 何をなし得たのか?
「時々は なる程 その楽器の力を頼んで
「不安なる時間を 慰めたことはあったけれど
「しかし かように それは我が気質の合うとはいえ 35
「獣たちの心を慰めることが出来たことなど 一度もない。
「私のスケッチ用画筆も この町の
「凡ゆる家々にまで 知られてはいる。
「というのも 野暮ったい掛け軸にとって代わり
「私の素描したものが 凡ゆる壁に掛けられている。 40
「ああ しかし なる程 私は罪人であるがゆえに
「世間は 夕食にさえ 私を招いてはくれないではないか。
「哀れな少年を教え 半ズボンの幼子をも
「学問へと誘導するのに 一体 私が得るものは 何だろう?
「仕事とは ルキアノスが言ったように 天からの 45
「最も過酷な罰として 与えられるものなり。
「<幸運の女神>に寵愛される馬鹿者どもは 肉を切り刻んでいるというのに

「私は 説教して そして飢えるのだ と世間は言うだろう。

「クリスマスの日に もし 私が借金取りに支払う

「ただ それに間に合うだけのお金があれば

それだけで幸せというものだ。

50

「尤も 時として 殆ど罵ったことさえ あったっけ。

「扉の敷居から

「私のこの貧しさが 他の貧しい人を 追い払ったときには

「そして 中身のなくなった酒樽が もはや

「人様の乾ける喉を 癒すことができなくなった時などには。」

55

「しかしながら 遂に 幸運なる瞬間がやって来た

「我が財布が満たされ 名声を獲得する時が。

「そうして 我が労苦すべてが過ぎ去れば

「＜希望＞は 最後には 休息を探したまえと 私に命じる。

「というのも <幸運の女神>が<旅行記を書け>と

60

「そう命じるまで 私に 繁栄の時など一つもなかったからだ。

「しばしば 私は その<売春婦>は 盲目なりと

「口汚い言葉で 罵ったこともあった。

「ただ 今は その<ふしだら女>も 見る目があると考える次第一

「なぜならば 彼女は 非常に優しい心を私に示すようになったからだ。

65

「真実を申せば 私は 今享受している恩顧など

「殆ど信じてもないのだ。

「閣下のお屋敷では 私は 歓迎されて

「名誉ある客人として 休息をとることは出来る。

「そして この旅行に対する彼の思いやりが

70

「彼の現下の親切心によって その掉尾を飾るだろう

「しばしば 私の耳にしたことであるが この手の貴族たちは

「ただ 言葉においてのみ 親切だということなのだ。

「しかし 真実のみが 我が庇護者を動かすのだし

「その友情は 凡ゆる約束により 証明されるのだ。」 75

このように シンタックスは 馬車のなかで
体をもたせかけながら 己れの思いを吐露していた。
というも 先へと歩みを進みながら物思いに耽っていると
或るときは 掃除人夫の頭陀袋に 挨拶を受けたり
或るときは 敷石の上に座らせられたり と 80
彼は 人ごみによって 痛く害されてもいたからだ。
他方では 新聞売りの小僧の喧しさに 耳を聳され
果物売の少女の手押し車が 彼の脛を打ち付けさえした。
そうして 注意深く 通りを歩めば
通りがかりの男たちの肘が 彼の脇腹を殴りつける。 85
そうするうちに 味気ない速度を上げながら 馬車の車輪は
シンタックスに ロンドンの塵の香りを 届けてくれる。
そして遂に 安全に引き返すために
彼は 馬車の安楽さを求めていたのだった。

彼の小さな旅行も終わりにになると 90
博士は 彼の高貴なる友人に会った。
二人は 共に 気楽に夕食の席に着き
それから ケーキにしゃぶりつき またワインを飲み込んだ。
そうして 手短かながら シンタックスは
その商売人との談合を 切り出した。 95

シンタックス

「私めは 閣下のご温情に 負っております
「黄金と名声を やがてこの手に入れますことを。
「櫛を入れていないこの鬢 私の黒い衣装
「(それも 背中のところは 錆が来ています)

- 「青ざめて やせ細った この私の不快な顔 100
「骨と皮だけの いわば死体同然の この身体
「それらは 商人の目に
「貧困というおぞましき実態を 提示してきました。
「同時に その彼は 私のこの書物に対して
「一瞥を与えるなどという礼儀さえ 示してくれませんでした。 105
「それどころか トルコ人の激烈さで
「私の作品を 悲しむべき言葉で 愚弄し
「彼自身 見たこともない物に対して
「己れの富を自慢しながら 痼癩玉を破裂させる始末でした。
「でも閣下のご親切なお手紙が <すべての出費は 110
「ご案じめさるな> と書かれていたものですから
「そのことによって 私の衣装は新たに染められ 帽子は再びしゃんとなり
「髪には香水が振りかけられ 私の身体もずんぐりとなりました。
「彼の目は 今や 私が幾分太ってツヤツヤになり
「この頬には 皺ひとつないのを 目にするでしょう。 115
「そうして 力と 威厳と そして活力が
「私を ひとかどの人物として 確立してくれました。
「彼は彼で 私のポケットの中を 閣下の手帳を
「鋭い目つきで 見回していた次第です。
「そしてこう言いました。『あなたの作品は確実に売れます。 120
「『そして学識あるあなたに 十分な報いを与えるでしょう』と。
「そう言いながら ダブダブのズボンを引き上げては
「その甲高い早口の言葉に ケリをつけ
「そのどでかい身体が許す限りに
「恭しいお辞儀を 私にしてくれました。 125
「そして もし彼が財布を片手にやってきたのであれば
「まさに かのサタンが 彼の印刷機を支配するでしょう。
「それほどに 私の書物は 法律的な危険を犯すような

「そのような欠陥は 微塵もありません。

「彼の私益だけを頭に入れましょう さすれば

彼は慇懃な人間になれるのです

130

「博士に対してなのか 悪魔に対してなのか 分かりませんが。」

このようにして シントックスと彼の保護者は座席に座って
昨夜のおしゃべりを 長く長く 続けた。

我が閣下

「あなたの素早い筆の運びは 人間の性格と

「またその顔を 美しく辿っておられる。

135

「あなたの最近の素描は <自然>に忠実で

「<羊皮紙>の持つあらゆる特徴を 与えてくれます。

「すべてに深く習熟され また巧みに仕上げられた一大作品—

「そのようなあなたの様々な資質のすべてに感化されて

「私は その高貴なる才能が どこから流れてきたのか—

140

「また その真価をいかに測定したらいいのかさえ分からないご仁が

「今甘んじられている運命を凌ぐような

「良き状態へと 獲得しておられていないのは

「何故なのだろうか そんなことを思い巡らしては

「ただただ その訳を知りたいと

奇妙にも心を高ぶらせている始末です。」

145

シントックス

「我が閣下。僅かの数ページを捲るだけで

「私の生い立ちと 両親が分かる仕組みになっています。

「慎ましい一群の人たちは

「快樂と苦痛の巡り合わせを 理解してくれるでしょう

「そして あなた 私の常に変わらざる榮譽ある友人は

150

「私の地平線が 広大に広がってゆくことをお命じになり

「私の<曇りの日々>に 明るい光線を放って

「より輝かしい未来を お約束して下さいました。」

「私の父は 恵み豊かな<自然の女神>によって形成されたような

「高貴なる人物でした。

155

「学識ある聖職者で 健全な牧師でした。

「更には パルナツソスの丘に住み

「また ヘリコンの小川で水浴びをする

「かの9人の乙女たちにも 愛されていました。

「人生の隔離された<谷間>にて

160

「傲慢さにも闘争にも 無縁なるものとして

「平和なる<美德>の道を教えながら

「人畜無害の日々を送っていました。

「この世界の 棘・茨の荒野のなかで

「子羊の群れを育成すべく 天命を受けた羊飼いでした。

165

「そして 彼らの時間が終われば 彼が以前に行った

「その場所へと 彼らを導く善人でした。

「いかなる<野心>も 彼の憩いを妨げることはなく

「その平和に嘯み付くような蛇も

「彼の胸の中では 育ちませんでしたし いかなる卑しい配慮も

170

「そこでの彼の満足感を 腐食したことはありません。

「そして 彼は 年に5千ポンドはゆうに収入があり

「しかも 穢れなき5千ポンドでした。」

「私の母は 容姿においても 容貌においても

「そして精神状態においても 第一流の女性でした。

175

「自分の静かな行動領域を 満足げに動き

「彼女が愛した夫と等価物のような そのような人物でした。

「最も気高い運命に飾りを添えるべく育てられて
「牧師の田舎屋敷に 光彩を添えました—
「牧師の妻 また 村の貴婦人に相応しい 180
「品ある行儀作法の数々で。
「二人は 愛し合って過ごしました。そして 20 年が経過した時には
「恐らくベーコン賞¹をも受賞する資格はあったでしょう。」

「そこに一人っ子が現れました。慈しみ合う
「優しい夫婦愛の 証しとなる筈の子供で 185
「実に それが私でした。可愛がられた男の子で 彼こそは
「彼らの日々の希望の星であり 日々の喜びの種でした。
「父は 餓鬼とも言うべき私の成長を気にする余り
「私を 他人の配慮に委ねることはなく
「この前途有望の悪戯好きの童児に 190
「己れ自身の生き写しになるような教育を施しました。
「そうして まだこの幼子が揺り籠にいる頃から
「彼は そのような未来の大人を形作ることに着手しました。
「私の巻き毛の頭に 15 回の夏が
「その陽光を降り注いだときに 195
「彼は 敬虔な望みとともに 私の成熟途上の心のすべてを
「彼の出身校へと 委ねました。」

「そこで 7 年という短い歳月でしたが

¹ [訳注] 原語はイタリック体で、“*The Flicht*” (『新英和辞典』では、1. 豚の脇腹のベーコン) とある。恐らく、ここは、“Dunmow Flicht” のことであろう。同じく、『新英和辞典』によれば、“Dunmow Flicht” = 「n. [the ~] ダンモウのベーコン賞 (イングランド Essex の村 <Little>Dunmow で、挙式後満 1 年と 1 日幸福にむつまじく暮らした夫婦に贈る flicht)」 とある。(この箇所は、我が大学の Richard Hodson 教授のご教示をも仰いでいる。)

「美しい学問が 私の唯一の関心事でした。
「私は 毎夜 毎日 タリー²の書物と 200
「ホメロスの詩歌の勉強に 明け暮れました。
「古代の学識についての事項ならば何でも
「熱心に勉強を続けたものです。
「そして 指定された科目のすべてに順応し
「学問を その起源にまで遡って行きました。 205
「しかしながら その途上では <花々>を摘むこともあり
「東屋で休らう<詩の女神たち>を訪ねたり
「彼女らの愛情の籠る微笑みに対しては
「沢山の短い叙情詩を作って それに応えたものでした。
「また 私は 音楽と絵画という芸術にもまた 210
「求愛するのを怠りませんでした。
「このようにして 私の青春時代は 長続きの見込みのないような
「余りに大きな幸福に包まれて 経過しました。
「父は そうするうちに他界しました。そして 彼の骨壺が
「私の両腕を満たす前に 愛するその配偶者を奪われて 215
「この世に滞在することを拒絶した母をも
「私は失い その母の喪にも服せざるを得ませんでした。」

「その後 何が起きたのか。私は 一人取り残されました。
「そして 世俗が 私を <自分のもの>として支配しました。
「華やかな<流行界>の 雑色の群れを求めては 220
「<快樂>の潮の上を 私は 航海しました。
「そうするうちに 荒々しい強風と嵐に揺さぶられ
「私の小舟は 遂には 破片となって 航路を見失いました。」

² [訳注] 原文は Tully とある。これは、Marcus Tullius Cicero [キケロ (106-43B.C.:
ローマの政治家・雄弁家・著述家)] (『新英和大辞典』) のことである。

「そうして 裸のままで浜辺に立ち

「私の財宝も失い 快樂も すでに過去のものとなっていました。」 225

「さて <運命>の気紛れな風に変化を強いられたのか

「私とその友情を育んだ友人たちは 親切心を失くし

「私の豊かなる日々を分ち持った者たちはすべて

「彼らが私を目にするや否や 足を背けてしまいました。

「そして 私がパンを欲するようなときに 230

「結局 熊を連れて オランダやイタリアを

「そして フランスを渡り歩いて

「この野獣が ダンスを演じる興業を行いました。

「しかし まさにとんでもない<熊公>³であって

「こいつと共にいるだけでも 破滅より悪いことでした。 235

「そこで 古典的な土地を彷徨し

「ギリシャの島々を航海しまわった挙句に

「(それは 例え <熊公>と繋ぎ合わせられた定めとはいえ

「(比較するもののないほどの 真実の快樂でした)

「私は休暇を取り <熊公>を置き去りにして 240

「ある質素なスイス人に お金を払い 悪態をもつきました。

「しかし もう二度と熊など引き連れるまいと決意して

「私が生まれ故郷の岸辺に到着したとき

「自由学校を経営し 副牧師になる事以上に

「将来への良い見通しはありませんでした。 245

「田舎の商売人の息子たちを教育し

「寂しい村の教会で 説教をし

「私の学識が不足しておれば 傲慢な嘲りと

³ [訳注] <熊公>は、原文は“Bruin”であり、「中世動物寓話などに出てくる熊の名前」(『新英和大辞典』)である。

「野暮な罵倒の言葉を浴びせかけられながらも です。

「高貴なあなたはお分りのように そのような嘲りとか罵倒など 250

「安楽にも慰みにも 決して繋がらないのですが。

「しかし 私に 別の行為が 昔の日々の愚行を

「示すことになりました。

「新しい光景が 私の人生の前に 開けたのです。

「正直に言いますと 閣下 私は妻を娶ったのです。」 255

我が閣下

「結婚されたそのお相手は 必ずや あなたの孤独な人生を

「改善してくださったのだと そのように思っても当然でしたが・・・

「その方の優しい視線と 魅惑的な微笑が

「あなたの労苦を 大いに紛らしてくれたであろう と。」

シンタックス

「愛そのものは それ自体としては 大変に素晴らしいものです。 260

「けれども それは 決して確固とした<食物>などではありません。

「そうして 私たちの新婚旅行が終わるや

「我ら二人には 何か多くのものが欠けていることに気づきました。

「これこそ 私の悩みすべての 原因なのです。

「私の収入が倍増した訳でもありませんし 265

「人間を苦しめる<愛>によって

「<理性>が果たすべき設計図から引き離されて

「結婚生活の譫妄状態のなかで 私たちは忘れておりました—

「人生の途切れることのない運命とは 一体何であるかということを。

「男と女が それぞれに薔薇の下で生まれ 270

「それぞれが 刺を発見する人生!

「他の馬鹿者どもが考えるように 私たちも

「<ヒュメーン>⁴の法律が 我らを一つにしたと考えましたが
「<自然>の女神が まさしく 己れの目的に忠実に
「我らを二つに作ったことを忘れていました。 275
「毎日 毎日 叫び声をあげる二つの口があり
「それが 朝と夕方を 満たす始末でした。
「私たちは 一つの誓いによって 婚約をしたのですが
「衣服に身を包む身は 二つでした。
「そして 私の嬉しさを増すように 280
「ドリーは 衣裳が大変好きなのです。
「私の頭には 一つの帽子が乗っかることで満足しますが
「ドロシーは 縁なし帽子も縁有りボンネットも所有しています。
「要約しますと 私と愛するドリーが<二人>でないような
「そんな日は一日とて ありはしないのです。 285
「私の親切なる運命が 私に一つの善を促しましたが
「ドリーは 閣下 子供を宿したことさえないのです。
「こうして 私たちは いつも<二人>で 偶然なのか
「<三人>になったことも ありません。
「彼女は 私の両腕に 美人としてやってきて 290
「彼女の唯一の資質は その美貌です。
「が 彼女が子供を街へと連れてゆくこともないおかげで
「正直に言いますと 私を大いに 救ってはくれました。」

我が閣下

「敬虔なる我が友よ 残りについては
「また日をあらためて お聞きしましょう。 295

⁴ [訳注] <ヒュメーン>。原文は“Hymen”であり、ギリシャ神話に出てくる<婚姻の神>である。ちなみに、この神は、「松明とヴェールを持った青年の姿で表される。」(『新英和大辞典』)

「心底から お話全体を知りたいと願うのですが
「商用があり 出かけなければなりません。
「もう 繰り返す必要もないでしょうが
「どうぞ 必要なものがあれば 家の者に命令してください。」

このような形で 閣下と博士は別れたが 300
閣下は 博士を 陽気で呑気な気分させていた。
他方で 彼の物思いは 多くの煙草を消化しており
遂に 彼の目が 休息の時間を取るよう 告げていた。

次の日の朝 朝食時となった時に
シンタックスは言った。
「もし 私が かように寛大でかように親切な人に 305
「必ずや 勿体無くも与えてくださるだろう
「ご助言を受け入れる希望をもって
「私の心を打ち明けるのを遅らせるなら
「私は 責めを負うことになるであろう。
「というのも ベッドに横たわっている時に 310
「ある突然の考えが 私を捉えたのだった。
「それが きっと 販売促進への<北西>⁵の通路を
「生み出してくれる と そう思うわけです。」

「私は 常に 忠実な真実な人間として過ごし
「何ら変わった世界を見てきた訳でもありません。 315
「この時代ならず 他の凡ゆる時代に関する
「歴史書のページに精通してもいるし

⁵ [訳注] 原文は“a North-West passage” (イタリック体) となっているが、訳者の能力不足で、ここは、意味が不明。

「今 権力の座にいる人たちに
「私の勉強の労苦を捧げることも出来るでしょう。
「確実に 語句の巧みなパンフレットならば 320
「法廷からも 注目を受けることが出来るでしょう。
「それによって 私は 神経質ながら己れの文章で
「政府の敵どもを 暴くことも出来る筈です。
「そうして 並外れた技術と配慮でもって
「現在の権力者を称え 支持することも出来ます。 325
「そうすれば 直ちに私は昇進させられるかもしれません。
「これ以上 貧しい著者を 単なる労働者としかみなさない
「いかなる馬鹿者の餌食にも 私はならないだろう。
「彼らは 些細な金銭を 恨みとともに支払い
「ちょうど料理の女中が鰻の皮を剥ぐように 330
「著者の思いが いかなる物かは 感じもしない愚鈍者なのです。
「あそこは ここ パタノスター通りよりも
「遥かに良いと 私は信じます。
「ここでは 哀れな蜜蜂が 学問という巣のなかで働くけれど
「結果として見るものは 商売人が反映する姿のみ— 335
「そして彼らが生み出した 知的な蜂蜜の代わりに
「僅かばかりの金銭を 代償として受け取るのみ。
「ただ 法廷に一人の友人さえ獲得できれば
「事情は ずーっと簡単なものになるでしょう。
「先ほどの意見を繰り返すことになりましたが 340
「それが 販売促進の<北西>への通路となってくれるでしょう。」

我が閣下

「我慢なさい 我が学識ある博士よ そして聞きなさい。
「どうぞ 私のご助言に注意なされよ。
「あなたが住むことを願っておられる国のことを

- 「私は 長いあいだ知って来ましたし 知りすぎたほどです。 345
「腐敗と 欺瞞と 羨望が 人が群れ集う傲慢な政治家の
「門のところには 待っています。
「そこでは 媚をうる甘言が 己れの道を突き進み
「そこでは 卑しい情熱が 口論に加わり
「互いに互の身体を貪り喰らいあう 野獣さながらなのです。 350
「そうしながら 微笑みが 裏切り心に満ちた心を覆い隠し
「利益への関心が プロテウスの役割を演じてもいるのです。
「あなたは いいですか 余りに有徳であられるので
「そのような権力者に またそのような目的のために
「その才能と 時間を 浪費すべきではないのです。 355
「あなたは 真実を完全に否定するわけでもない
「そんなもとももらしい虚偽を でっち上げることは出来ませんか。
「うまく誤魔化すことの出来るような
「そんな真理を 語ることは出来ませんか。
「あなたご自身が考え 書いて そして語らなければならないことを 360
「他人に求めることに 耐え忍ぶことは出来ますか。
「今日 彼らの体制を取り込んで
「明日は 静かにそれを 振り払うのは いかがでしょう。
「カメレオンみたいになって ある保護者が与えたいと思う保護色を
「受け入れてはいかがでしょうか。 365
「あなたは いわば<大蔵省>の書記官となるには
「正直すぎるし また 誇りが高すぎる人物です。
「そこでは あなたは のろのろと進む時間を耐えねばならず
「また 権力者というイメージに一
「職務については 己れのこと以外に 殆ど何も考えない 370
「成り上がりの小僧共に一 媚びへつらわなければなりません。」

「長いこと あなたは いわば雇われ奴隷の身で

- 「終始変わらず 猪突猛進されてきました。
「法廷で教示される道德律のために 純粋に湧き上がる思いを
「その都度 犠牲にされて来ました。 375
「善なるものと 悪なるものに属する
「凡ゆる区分が
「保護者の金銭のわずかなおこぼれのために
「あなたの理性の領域を犯すときに—
「あなたの若き日の 子としての自慢であった 380
「真理に枠入れされた 大胆な論理が
「政策^{ポリシー}の 束縛する学派の
「動揺する規律に 屈する時—
「また 企みと策略が あなたの胸から
「かつての 名誉であった客人を 追放するとき— 385
「多分に あなたは 脇に置かれ 誰にも聞かれず
「忘れ去られるでしょう。そうでもないかもしれませんが。
「或いは 美德さえ失われれば
「悔悟と ある些細な役職を与えられるだけでしょうね。
「これは いいことではありません。有徳な友よ。 390
「あなたは もっと良い事柄に 注意を向けるべきなのです。
「ダウニング・ストリートへの 凡ゆる思いを捨て去り
「パタノスター通りを ひたすら望むことです。」
- 「商売人たちを あなたは 非難することは出来ません。
「彼らには 金銭が固有の目的だからです。 395
「なされうる限りのものを 獲得することが
「凡ゆる取引の目的だからです。
「銀行家も書物売りも 似たように
「利益あるものすべてに 襲いかかって行くのです。
「そして 同じような精神に あなたは 400

「<ミンシング通り>でも<ランバード街>でも 出くわすでしょう。

「私たちが知らなければならないことは それは 単に

「<パタノスター大通り>の野暮な商売人だけに
限らないということなのです。

「成功は うまく書くかどうかに懸かっています。

「書物売りは 書物が売れば 額づきます。 405

「商品取引所では 毎日午後3時には

「この同じ原理が そこへと駆けつける多くの群衆を

「引っ張ってゆくのが 分かるでしょう。

「そうして 博士 いいですか。 正しいことか間違ったことは別にして

「それが 古きイングランドを強力にした当のものなのです。 410

「<羊皮紙>の店には なにか詐欺めいたものがあるかもしれませんが

「友よ それも我が国家の支えなのです。

「善良なあなたですから そのことを進んで軽蔑されるでしょうが

「古きイングランドは それなしでは やってゆくことが出来なかったのです。

「恐らく それ無しでも 立派な国であり得ましょうが 415

「ただ その際には 半分の偉大さにも 達することは出来ないでしょう。

「私は 今あなたの高名なお名前を待っている

「<名声>とやらを 楽しみにして待っている訳です。

「そして あなたの骨折り仕事が十分に報いられるとき

「あなたも 業務取引の<賞賛者>となることでしょう。 420

「<羊皮紙>は 知恵よりも 金銭を尊重し また

「財布を自慢する質の そのような精神であるのかもしれませんが。

「しかしながら 博士よ <羊皮紙>は

「売るために作られる種類の書物が 分かっています。

「実際に そのポケットがいっぱいの人は 425

「頭蓋がいかに空っぽであれ

「計り知れないほどに 鈍感であれ

「判断力のない群衆のなかにあっては
「例えば その頭が 批評的な見解と
「豊かな学識が詰め込まれている人よりは 430
「誇るべき 遥かに偉大な理由を 見出すものです
「もし 彼の頭に 用意が整った金貨の
「祝福すべき指令が付け加わらなければの話ですが。
「たくさん書いて金持ちになりなさい。また 書店主や
「或いは その手のやさ男の嘲りなど 恐るに足りません。 435
「<羊革紙>は 政治に従事している輩のような
「卑劣な策略など 持ち合わせていません。
「あなたの多種多様な学識が 世に知られ
「あなたの作品が 町じゅうで 売れるようになるまで—
「そして **運命の女神**の悪意を解決したあとで 440
「あなたの名前が 書かれたものを裁可するまで—
「<羊革紙>に その報酬を与えるようにしてください
「そして **パタノスター通り**を決して軽んじなさらぬよう。」

シントックス

「あなた様のご親切なお言葉には 答えようもございません。
「ただ 閣下のご人格に感謝し そのお言葉に従ってゆく所存です。 445
「さて 私が最後に美しいロンドンを見て以来
「優に 二十年が経過しましたので
「今日という一日を 静かに散歩しながら
「様々なものを調査するという仕事に当てたく思います。
「時間と偶然の出来事が どのような変化を齎したのか— 450
「どのような富が蓄積され 芸術が試みられたのか—
「いかなる趣味が 想像力のなかで 示されて
「町に どのような新たな光輝を与えたのか— そんな点をです。
「そのようなことを成した後で **コヴェント・ガーデン**へと

「足を運び 芝居を見たいと思っています。」

455

「それならば」と閣下は言う。「私たちが 次に会うときは
「特別な宴会と 洒落込みませうぞ。

「そして 我が著名なる友人に 是非とも

「演劇というものに対する芸術観を ご披露願いたいものですな。」

博士は額づきながら 立ち去って行く。

460

奇妙な歩みをしながら 進んでゆく。

彼は公園を通過し 広場の一つ一つを見ては
凝視し 他人の凝視を誘う。

遂に 指定された時刻に 彼は

芝居小屋の扉へと 急いで

一階席に 己れの位置を占めた

ある批評家と 学者のあいだに。

465



それには理由があり 今や 批評家と学者たちは
町に無意味な言葉を 拡散することで知られていたし

そして 日々の新聞記事でも 彼らの知識の総量が

いかに僅かのものでしかないのかを 示していたからである。

470

「そうだなあ。」シntaxは 辺りを見回しながら言う。
「大した場所ではないな この広大な虚無の空間は。
「円柱も 入念に作られたとは思えないし
「古風な装飾品など 一切ないではないか。 475
「あるのは ただ けばけばしい色彩で ちやちな趣味を示す
「弱々しい 気紛れな荒廃品ばかりではないか・
「聞くには余りに広く 見るには余りに長く
「全然意味のない シンメトリーで一杯だ。
「各部分も 互いに答え合い 480
「仕切り棚のそれぞれが その仲間を映し出している。
「悲しいかな！座席の列を作るのも 何と安易であるかを
「余りに見事に 示している。
「壮麗なるもの いずこに？ 感動させるような全体は？
「劇場なるもの 魂を持たねばなるまいて。」 485

「失礼 旦那。」批評家が言う。
「これらの劇場というものは すべて商売品なのですよ。
「そのオーナーたちは 渦巻き模様とか装飾帯とか 関心はないのです。
「彼らを喜ばせるのは ただ 大入り満員になることのみ。
「そして いいですか。出来る限り 客を突っ込み 490
「ぎっしりと詰めることが 彼らの見取り図なのです。
「あなた様のような 気高い 建築にお詳しい方々が
「沢山いらして 場所を取りになればいいのですけどね。」

「この光景は 文字通りのものですね。
「天分ある人がいたら もっと良く管理していたでしょうに。」 495
シntaxは答えた。「ただし 私も 願ってはいますよ
「彼らに 最大の利益を 得させてあげたいと。
「ただ ある才能の持ち主が—イギリス育ちのイギリス人

「であればいいのですが—現れて

「アッチカ風の芸術と この財産志向の精神とを

500

「うまく 混合できるといいのですが。ただ 確実に現れるでしょうな。」

こう彼が話していると カーテンが開き

その長広舌にも 終止符が打たれた。



しかしながら 劇が上演されている間にも

彼らの会話は 再開され

505

遂には 劇全体が終わるまで 続いた。

そして 彼らが劇場の扉を後にする際に

その批評家は言った。「あなたと すぐに

「お別れしなければならぬと思うと 心が痛みますね。

「あなた様のような アリストテレスのご友人と共に

510

「一杯やれたらと 強く願ってやみません。

「ところで あなたは 彼をよくご存知ですゆえ

「彼の居所を 教えていただけませんか。」

「今は どこか 私は知りません」シンタックスは

答える。「私は 帰りを急がねばなりません。

515

「ただ これだけは はっきりと言っておきたいのですが—

「劇場でも あなたは 彼に出会うことは殆どないでしょうね。」

第二十四曲

さて シントックスは 馬車に乗り
だらしなく寄りかかり身体を延ばして 帰路につくと
心の中で まさに 背後に残してきたものに
深く思いめぐらさざるを得なかった。
低い声で こう呟いた。「私は芝居を見てきた。 5
「それはシェイクスピアの劇だったが 仮面劇であった。
「私は 笑劇をも見た。しかし それが何だか 殆ど分からなかった。
「ただ 見たら忘れること ただそれがいいことと思われた。
「非評価とも会ったが 彼が好むのは
「うんざりさせる一連の意味無き言葉を聞いただけであった。 10
「おお 神様のお恵みあれ。〈学問〉は何処に行ったのか。
「その聖なる頭を 彼女は どこに隠されてしまったのか。
「いやいや 〈学問〉の女神でさえ 町のなかに
「かような間抜け連中を孵化するとは いかにも墮落されてしまったのか。
「純金は もはや 見られない。 15
「純粋な鉱石など 探そうとしても無駄であろう。
「混ぜものをされて すべてが その価値を貶めているのだ。
「そうして どこか細すぎるノンセンスが 席卷している有様だ。
「深夜に 灯油が消費されることも 今や殆どなく
「〈学問〉という労苦を 楽しむものも極めて少ない。 20
「全く無頓着に道を さ迷いながら
「毎日 何の収穫も獲得せずに
「彼らは その表層に浮かぶ藁屑で満足し
「その下に横たわる真珠を 探し求めることなどしない。
「人目につかない川の底に 何があるかを尋ねもせずに 25

- 「岸部で ただ 海藻を集めているだけだ。
- 「かつて このような時代があった。劇場は
- 「その時代に威厳を与えると 見なされた時代が。
- 「学識ある人たちが 一階席のベンチに座っている姿が
- 「よく見かけられた時代が。 30
- 「己れの技と<自然>に忠実に
- 「かのギャリック⁶が 種々雑多な図柄を描いていた時代が。
- 「彼は 凡ゆる情熱と 凡ゆる思想を
- 「完全な完璧の域にまで 齎していた。
- 「<自然の女神>に 最高のレベルにまで教育を施され 35
- 「まさしく <自然>自身の類似物となり
- 「まるで <自然>がそこにいるかのように思えたものだった。
- 「老齢と 悲哀に 全身を震撼させられた
- 「かの老いたるリア王を装うのであれ
- 「人間的な心の究極の拷問とも言える 40
- 「あのロメオの恋の炎に 取り憑かれるのであれ
- 「また 敵の花嫁を征服する際の
- 「陽気なロザリオの燃え上がる誇りを装い
- 「熱き獐猛なる野心を持って
- 「マクベスやグロースターの姿形を取るのであれ 45
- 「彼ギャリックは 繊細極まる変化をつけながら
- 「それぞれの情熱を 目に見えるように演じたものだった。
- 「言葉そのものについては さほど大きな声で発しなかったけれど
- 「まさに シェイクスピアが書いたとおりに 演技をしたものであった。」
- 「そうして 彼はまた 笑いを愛する<喜劇>の 50

⁶ [訳注] 原文は“Garrick”である。David Garrick (1717-79: 英国の俳優・劇作家; Drury Lane 座の主宰者; Shakespeare 劇の演技で有名『新英和大辞典』)

「陽気なる快楽を 取り繕う時も同じように 振舞ったものだ。
「(というのも 彼は 精神の真のカメレオンの芸術家として
「(写実的場面描写の分野において知られている
「(凡ゆる気紛れな 忙しげに変化する場面をも
「(自由に徘徊することが出来たがゆえに。)」

55

「森番の策略のなかに 或いは 彼が
「ベネディクトのなかに 愛を隠すよう 努めたときに
「また 彼がドラッガーの胴着を来て 光り輝いたとき
「或いは ブルートと同等の権利を身につけたとき
「また やきもち焼きのカイトリーと戯れ
「<至福>のなかで 同じ情熱を試みた時に
「何という真実らしさと力を放って
「その情熱を 異なった方向へと促したことか。
「その姿・形を 入念に捏ねあげ 新鮮な装いを作り出して。
「しかし 彼は 依然として<自然>に忠実だった！
「いやいや 彼は<笑劇>においてさえ 観客を動揺させる程の
「興味深いものを 呼び起こすことが出来たのだ。
「心を欺いて 悲しみを晴らすかと思えば
「苦々しい涙を 溢れ出させ
「全員の目に 喜びを灯し
「また 魂を 苦悶のなかへと突き落としたり。
「彼は いつも <自然>に忠実であった。
「偽りの技で 注目している人 聞き入っている耳を
「押さえ込むことも 彼は しなかった。
「劇芸術の 幅広い経歴すべてにおいて
「彼は <自然>という学校で学んで来た
「誤ちなき規則を 大きく踏み出すこともなかったし
「凡ゆる部門で 彼は 人より大きく抜きん出ていた。

60

65

70

75

「彼は あらゆる物を目指し そのすべてがうまく行っていた。

「その良き時代には 単なる光景の効果のみを 80

「見にゆく人は 誰もいなかった。

「そこには 絶え間のない笑いがあり 強いられた洪面があり

「醜いほどに 顔を歪める 自然の動作があった。

「その良き時代には 喜劇のなかに ピエロや

「クラウンを見にゆく人は 誰もいなかった。 85

「人々は 完全な認識する能力を求め

「学識ある批評家は それを学ぶために そこに趣いていた。」

「おお 崇高なる 不滅のシェイクスピアよ。

「時間の領域においては 比肩するものなき天才よ。

「彼は プロメテウスの目的をもって 天上の火を 90

「盗んでくるようなことは しなかった。

「彼には むしろ 天への思いそのものが

「聖なる恵みによって 降りかかってきたのだ。

「彼は <自然>という書物の 凡ゆるページを読み

「人間の あらゆる世代と 行動を 95

「深く読み込んだのだった。情熱が辿るすべての進路を

「抵抗するもののない力で 辿った。

「それどころか 人間の技以上の技でもって

「未知の感情を 人間の心に伝えたのだ。

「まさに 彼の魔法が望むがままに 空想の翼で天翔り 100

「魔法が望むところへと 飛んでいったのだ。」

「彼のページは いつまでも生きて 時間と歳月の全てが

「経過するまでは 生き続けるであろう。

「詩人は 時間の果てまで

「己れの作品のなかで呼吸し その韻律のなかに住まうのだ。 105

「しかし 役者が 休息するために沈み込んだら
「そして芝土が 彼の胸の上に 積み上げられたら
「悲しいかな 流行した名声のみが
「彼の名を飾るために 残っている全てなのだ。
「劇の子供たちは 借用した役割のなかで 堂々と歩み 110
「また戯れて しばしは 人生を離れている。
「そうして 彼らは皆 忘却という宿命を共有する。
「スミスも シバー⁷と同様に 忘れ去られるのだし
「シバーは 魅惑的な芸術で
「心臓の鼓動を 目覚めさせるであろう。 115
「しかし その名前も 消滅すべき名前であり
「愛すべきスミスという名前も 同様であるだろう。
「そして ギャリック自身さえも 何も残さず
「ただ 一つの墓が 彼と彼の芸術を 飲み込んでしまうだけ。
「そして他者の心の中で 彼を歩き続けさせることのみが 120
「記憶の女神が与えることの出来る 全てなのだ。
「我らに言えることは一おお 悲しいかな 何と虚しいことよ。
「彼に似たものに会うことも 二度とないだろう。」

この批評的スピーチが 終わる丁度そのときに
馬車は かの閣下の門の前に 止まった。 125
しかし 優しき我が閣下は すでに就寝中。
そこで シントックスは 自分の寝室へと急ぎ
そこで パイプを吹かし ボトルを開けながら
彼は アリストテレスを 葉巻のようにひと噛みした。
そして 和毛のベッドの上で 身体を伸ばしては 130

⁷ [訳注] Colley Cibber (1671-1757: 英国の俳優・劇作家・桂冠詩人 (1730-57) 『新英和大辞典』

頭は 阿片の香りに包まれて 眠りに就いた。

彼は よく眠ったが ある声が「まだ お眠りに
「なりたいですか」と 伺いを立て

「ご意志を知りたい」と告げた。それから 更にその声が語る。
下で 閣下と朝食が待っていますよと。

135

「やあ」と 姿を現すや否や 閣下は語る。

「芝居は あなたの心を 元気づけましたかな。

「フォールスタッフは 朝の新聞で批評されていますが

「これまでにいほどに うまく演じられたとか。」

「その批評家たちは」シntaxは 微笑みながら言う。

140

「己れの仕事に熱心なだけの 哀れなへボ批評家にすぎません。

「一人は一階席の 私のそばに座っていましたが

「知者でもなく 批評家でもありませんでしたね。

「幕間には 二人で どこが最も良かったか

「どこが悪かったのかを 論じ合いました。

145

「そうして 幕間を その芝居に対する互いの意見を

「交換することで過ごした訳でした。

「そうして 二人の意見は食い違うところが多かったのですが

「その間 完全とも言える相互信賴的雰囲気支配していました。

「多分 私たちの古典に関する議論をお聞きになれば

150

「あなたのご想像力も 満悦したのではないかと思いますね。

「思いますに 我が閣下。この私のような批判ばかりの<聖者>が

「舞台上演じられる諸気質について 知っているすべてを

「繰り返し話すことを許して頂ければ

「必ずや それは 大きな楽しみの種となること 請け合います。

155

「それは 一個の劇が どのような形式を取るべきか

「どのような効果的に 役者は 自己の役割を果たすべきか

「劇そのものの 純粋な法則とは 何か

「真実の天才が ある演技を 自然の女神に示すときに
「その女神が 『それらは 私のモノ』と宣言するほどの 160
「そのような光景を引き出す その源は 何なのか などがあります。」

「彼は おそらく それ以上は 知らなかったでしょう
「丁度 あそこで沸騰している茶釜がそうであるように。
「そのように 彼は 泡をたてる以上のことはしなかったし
「いかなる苦労も 面倒事も避けて通る輩です。
「彼のそばに座っている人たちが 苦難を感じていてさえもです。 165
「確実に言えるのは 彼の言葉を聞くこと自体が 苦難なのです。
「新しく建てられた劇場や あれこれについて
「一般的な 些細な話題を巡っておしゃべりをしたあとで
「私たちの目の前を通り過ぎた場面が
「次のような疑問と 答えを生み出したのでした。 170
「つまり その場面が出現する まさに その順番に従い
「我らの<意見のやり取り>⁸を ご説明致しましょう。」

批評家

「おお 何たるフォールスタッフか。おお 素晴らしい。
「おお 偉大なる演技よ。神聖なる演技だ。」

シntax

「彼の演技は素晴らしい。請け合ってもいいですね。 175
「あらゆる演技が 彼のお腹のなかで座っている。」

批評家

「しかしながら あなたの冗談にはそれらしき敬意を表して

⁸ [訳注] 原文はラテン語で“our *quid pro quos*”となっている。

「私は 次のように言う以外に 真実らしき言葉を
「語れることはありません。『あなたは、この芝居以上に
「『優れた場面を 目撃してはおられない。 180
「『あなたが見られる 賞賛すべき役者とは
「『肥った騎士を 魅惑極まりなき程に 演じるような役者ですね。
「『彼の優れている役割は この役であって
「『クインでさえ 彼の半分ほどにも上手くは演じられない』と。」

シンタックス

「あなたは そのクインが 舞台を飾るのを見ておられない 185
「彼は あなたの父上がこの世に誕生される前から 演じていたのですぞ。
「いいですか あなたよりも前に生きていた批評家たちは
「あなたとは違う物語を 形成していたことでしょう。
「この劇に関しては 私が生まれた故郷の田舎町では
「もっとうまく演じられるのを 見たことがあります。 190
「躊躇なく言わせてもらいますが
「私は この劇場の役者たちを見て シェイクスピアの書物には
「欠伸をさせてしまうことになりかねない この役者たちよりも
「私自身の貧しいながらの判断力を導きとして
「我が家の 居間の暖炉の傍らで 195
「まさに 彼の劇そのものを 読みたいものですな。
「私が フォールスタッフを 自分に読み聞かせるとき
「私は 陽気な子供のように 笑ってしまうのです。
「そのような時には シェイクスピアのみが与えることの出来る
「活気づけるような 光の輝きを この心は 感じ取るのです。 200
「己れを弁護して 殆どユーモアはないが それでも
「正気の意味が孕まれた 威張り腐ったような言葉使い—
「卑猥な冗談— 素早い奇想—
「無数のホラ吹き芸を 自慢した言葉—

- 「半分ほど重々しい質問と答えの数々— 205
- 「入念に磨かれた 独白群のなかのセリフ—
- 「愛にも 憎しみにも 殆ど時間を許さない
- 「疑惑に満ちた思索と 快活な無駄話—
- 「それらが 順列を成して 次々に <否>から<然り>へと
- 「<然り>から<否へ>と 流れるのですが 210
- 「そのような胸躍らせるものは 今 商売をしている
- 「舞台の上の詐称者からは 伝わってこないのです。
- 「嫌味な笑い 笑うべき皮肉が近いことを告げる
- 「流し目—
- 「それが語らえる前に 次の場面の冗談を 215
- 「適切に 予め予告している 警告の表情—
- 「準備された虚偽を隠すために装われた
- 「厳かではあるが 非常に陰険な態度—
- 「何か鋭い洞察力を示す 輝く意味に溢れた
- 「そのような役者の目を 今宵は 拝ませてもらっていないのです。 220
- 「再び あなたのお許しを乞うて 告げておかねばなりません。
- 「お腹^{なか}以外に フォールスタッフは 何者でもないのです。」

批評家

- 「なる程 ご尤もですね。しかも真実らしきもあって。
- 「でも 私には そのような真実とやらには 関係はないのです。
- 「確信できますが 私は 正しく伝えるでしょう 225
- 「魅了された観客が 今晚感じた 大きな喜びを
- 「報告しなければならぬのです。
- 「そして 実際に 大いに悲しいことは
- 「明日の新聞記事の批評欄を 文章で埋めるために
- 「あなたのご意見を引用することなど 全然できないことです。 230
- 「私の軽快な批評が 読み手には好まれるでしょう。

「そして 大衆は 私の言葉を受け入れるでしょう。
「というよりも 周囲で聞こえる拍手喝采の音が
「あなたのこじつけのお考えのすべてを 破滅させるに違いありません。
「本当に 私は 私が笑うところで あなたは笑われない— 235
「それが まさに 不思議なのです。」

シンタックス

「私の筋肉は どこか他の方向へ引っ張られているのです。
「欠伸をしながら 笑うような器用なことは出来かねますな。」

批評家

「しかし あなたは 場面場面は素晴らしいとお認めになるでしょう。」

シンタックス

「演技がどのようなものであれ 演技そのものは神聖なものですよ 240
「そして いかなるパントマイムにも適しているでしょう
「しかし 私が不満に思うのは このことです
「これらの芝居は 私の忌み嫌う<悪ふざけ>の類です。
「画家の技倆を この劇は褒めたたえ
「華やかな見せかけに 成功が依存しています。 245
「衣裳のほうは 正しいデザインで作られており
「それらは 立派に特徴付けられ また美しい
「昨今の役者たちは 思いますに おお 神の祝福あれ
「そのような衣服を身につけている者たちから
芸を学ばなければなりません。
「私がうっとりとして見ることの出来る 250
「役者を与えたまえ 芝居を与え給え—
「衣裳とその場面が 上等な紡毛織りで作られているとしても。
「と言うのも もし 場面が高度に仕上げられていても

「役者たちが 当然そうあるよう 演じても
「このような重たい けばけばしい装飾品を見て 255
「喜ぶような人は いないだろうからです。
「古代ローマのアウグストスの治世に活躍し
「劇について論じた ホラティウスの言葉があります—
「『それほど騒音とともに 劇と そして演技と
「『外国の高価な衣装が見られるのです。それらをただただ身につけて 260
「『役者が舞台に立つと 右手が左手に打ち合わされます。
「『ここまで彼は何か言ったか?—別に何も。
何が それでは気に入っているのか?
「『タレントウムの染料でスマイレを模した羊毛です』。』⁹

批評家

「ちょっと失礼 尊師様 私の周り一帯に
「騒音が酷くて 私の頭を混乱させます。 265
「そして 私が全力で注意を払っても
「あなたのおっしゃることは 殆どわかりません。
「真実のところ 私は 大学を出てから もう長い時間が経っていること
「そのことを認めなければなりません。
「ヴェルギリウスもホラティウスも 270
「小手先で操れる程度に 私は 彼らの友人と思っていますが
「ギリシャに関する知識は 完全にお手上げて

⁹ ここでは Horace の *Epistle* II, Canto I, 203-207 がそのまま直接に引用されている。この5行の翻訳に関しては、[litterae.blog8.fc2.com/blog-date_20/207.html](http://litterae.blog.fc2.com/blog-date_20/207.html) を参考にさせて頂いた。以下はここで引用されているラテン語原文である。

“Tanto cum strepitu ludi spectantur, et artes,
“Divitiaeque peregrinae: quibus oblitus actor
“Cum stetit in scena, concurrat dextera laevae.
“Dixit adhuc aliquid? Nil sane. Quid placit ergo?
“Lana Tarentino violas imitate veneno.”

「それを告白するだけで 赤面の至りです。

「従って あなたの仰る意味を

何とか理解する努力をしなければなりません。

「あなたのギリシャ語を 翻訳して頂けたら有難いのですが 275

「ただ 笑劇が 今 まさに始まる場所ですね。

「必ずや それは あなたの不機嫌さを取り除いてくれるでしょう

「ほら 今 あなたは微笑みを浮かべられたように思いますが・・・。」

シンタックス

「その出し物はおどけており 野卑な快楽を

「生み出す傾向を それにふさわしく 持っていますね。 280

「しかし メリー・アンドリュースも 今思えば

「これと同じ程度に 私を笑わせました。

「役者とは シェイクスピア翁の規則を見捨てたら

「ただ 馬鹿を演じるに過ぎなくなります。

「そして 判断力さえない烏合の大衆を喜ばせるために 285

「彼自身の嫌味なノンセンスを放つはめに陥るのです。

「そして 彼が笑いを供給するために 毒づくとしたら

「それこそ 教区吏員の鞭が その後に 続くことになります。

「あそこにテレンティウス¹⁰が こちらにプラウトゥス¹¹がいて

「彼ら二人こそが 私たちにもっと良い教えを垂れるのだと思います。」 290

批評家

「テレンティウスなら 私も知っています 織工が 彼の縞子を

「織り上げるように。彼は ラテン語で書きましたね。

「彼は 喜劇の月桂樹を被るに 十分値いました。

¹⁰ [訳注] Terence (Publius Terentius Afer : 190?—159B.C.) ローマの喜劇詩人

¹¹ [訳注] Plautus (Titus Maccius Plautus: 254?—184 B.C.) ローマの喜劇作家

「ウェストミンスター校のために 彼は 劇を書きました。

「また プラウトゥスも 名高い教師で 295

「弁護士たちが 大胆な宣言をして

「ラテン語と英語で 叱りつける

「『無知の者』という笑劇を 書いたのだったですね。」

「という訳で 私たちの議論は 終わったわけでした。

「その内容は 心の慰みにさえないなら 修復さえ出来ないものでした。 300

「あなたが大声でお笑いになるのも当然かもしれませんが 私にしたら

「知恵者の作品に 判断を下す際に

「馬鹿者たちが 隣に座っているのを見るときは

「まさに 泣きたい思いに駆られて 仕方がないのです。

「確かに 閣下 私は芝居を愛する者に違いありません。 305

「ある役者が 楽屋の暴君たちによって

「ロンドンの劇場の舞台から 追放される時でさえ

「私の町の人たちは 帰りゆく際に

「数日は 滞在するよう その人に

「説得したりすることを 禁じえないのです。 310

「それから ドリーと私は 我らの田舎劇場の座席では

「その姿が 一際目立つということになっています。」

こうして 彼が しばしば頭を垂れ 五十もの「いつ」

「どこで」そして「いかに」などを 繰り返し 話しているとき

かの<羊革紙>氏が 厳かな顔つきをして 姿を現し 315

博士の書物について あれこれと語りだした。

彼は言う。「あれ 本当でした。ある学識豊かな友人が

「あなたの原稿を 大変に誉めそやすのです。

「彼は言いました 『あれは 学識と 趣味と 320

「『そして生气をもって書かれた 価値ある作品である』と。



「もし彼が 判断ミスさえしていなければ 描かれたスケッチもまた
「まさに相応しい特徴を持っているとのことでした。

「そして それらは 時代の気質にも合致していますし

「更には 閣下殿下の庇護も 受けている。

325

「私めは 従って その作品を購入させていただく意志を強めており

「お金は いくらでも差し上げたいと思う次第です。

「最近 は 紙の値段も高騰してまして

「作業員の賃金にも ままならない—

「また その書物は重厚なものであり 印刷作業員の手だけでなく

330

「版画師の手をも 煩わせることとなるでしょう。

「更には 出版にこぎ着けるまでには リスクも伴います。

「さて 印刷屋がその仕事を成したあとには

「今度は その商売用の主要作品に 多分

「新たな税金が 課せられる—

335

「言うまでもなく 価格も 相当高いものになるでしょう。

「悪いことには そのような高い値段の書物を

「購入するような人たちの数は 極めて少ないと考えられます。

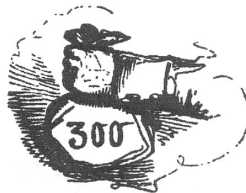
「しかしながら その作品は 私の頭から離れません。

「従って 私は 私の運を試し 閣下殿 三百ポンドのお金を 340
「支払わさせて頂きたいと 強く願う次第です。」

取引についての しばしの会話があり
交渉は 完璧に果たされた。
作品は譲渡され 代金が支払われる。

閣下は言う。「あなたの利益は あなたのご苦勞に比べれば 345
「まさに 取るに足りないものでしょうが
「(なぜならば <羊革紙>は 生きている如何なる人たちよりも
「(取引に関しては うまく事を運ぶ輩ですから)
「しかし その作品は わが友に 一つの名前を付与し
「文学的な名声を刻印すること 請け合いますぞ。 350
「それは パタノスター通りを 支配することになるでしょうし
「また <羊革紙>に敬意を表わさせる結果となるでしょうね。
「そうして 名前が知れ渡れば いいですか
「その所有者は ベッドで安楽に横たわることが出来るという訳です。
「もっと書き続けなさい。学識の道を歩み続けなさい。 355
「各書店は あなたにくっついて離れなくなるでしょう。」

多くの話が 閣下の役割となり それが果たされた。
結局は それは 閣下の心の優しさを証明することとなったのだが
シntaxは 痛く感動し 心からの感謝の返事をしたのだった—
言葉でもってではなく一潤む目でもって。 360



第二十五曲

「我が閣下」は退去された。博士もまた
他にすることもなく
その高貴な保護者の書齋を
少しだけ 覗いてみる気になっていた。
そこで 彼は 何の気兼ねもなく 5
豊かに膨らんだモロッコ椅子に座りながら
一冊の書物を捉えた。しかし眠りの神モルフェウスが
その尊厳たる額に 芥子の花を降り注ぎ
「空想」も遅れはすまじとばかりに
彼の心のなかに まさに結構なる計略をしかけ 10
目まぐるしく動く夢を 織り成していた。
そこで シンタックスは その夢を「我が閣下」と
夕食を共にする際の 或いは 共に盃を傾ける際の
痛快な 格好の話題としたのであった。

夢

「ストランド通りにいる そんな夢を見た。 15
「私の頭上には 空中に 無数の書物が飛び交い
「様々な装丁で 美しく輝いていたー
「そのような風に見えたと 私は思っていた。
「まだ閉じられていないページが 私の目に晒され
「それらが一種に翼になり 鳥のように飛び交い 20
「堂々たる飛行をしながら 無数の群れとなって
「空中を それらは 通過して行った。
「そして それぞれの書物からは ラベルが落ち



p. 314.

「落ちながら 著者の名前を綴っていた。
「そうしながら さほど時間が経たないうちに 25
「懐かしい気持ちと 恭しい畏敬の目で 眺めたものは
「ギリシャとローマ古代に彩を添えた いろどり
「かの 褒め称うべき詩人と聖者の一群が
「まさにかの梟の似姿をした ふくろう
「厳かな鳥に 率いられて進む姿であった。 30
「その鳥はパラス・アテーナーの鳥であって 彼らを 直接に
「テンプル・バーの 開けられた門のなかへと導いていた。
「年次刊行物一覧と報告書と賢明に書かれた重々しい登記書があり
「テンプル門の両側には 歩哨たちが立っていた。
「一方で ワイン業者は 六十もの 武装万端の 35
「四つ折れ版に 彼の要約文を 示していた。
「子羊がメーと鳴き 馬が嘶き
「騎馬行列に 敬意を表していた。
「クリフォード宿の近くでは <逮捕令状>なる

「醜い一団が 立ち並んでいるのが見られた。 40
 「彼らの羊革紙の旗が現れると
 「直ちに 群衆で溢れた通りも 人気ひとけがなくなり
 「その列は 押し合いへし合いの群れにも煩わされずに
 「堂々と 通過して行く。
 「聖ダンスタン¹²の野蛮人たちは 押し黙り 45
 「静かに 最善の挨拶を送っていた。
 「雄弁と詩歌を忌み嫌い
 「彼らは 鐘を目覚ましては 鐘の音に合わせて 話し合っていた。
 「隅々にまで渡って 多くの“I”とか 多くの“Me”が満載された
 「アースキン¹³の 名高いパンフレットが 50
 「サージャント宿からいで来たり 壮大な行列を
 「称えるための 堂々たる演説を行った。
 「また 出版業者たちが 現れ出て来て ラドゲイト通りの
 「見知らぬ群衆を 出迎える。
 「そして それぞれが 筋骨隆々たるその背中に 55
 「大きな紙に書かれた 年鑑を背負っているのだ。
 「ほんの短い間であるが 学識のある一群は
 「アヴェ・マリア路地の前に佇み
 「医学的知識の座である その大学を
 「かのガレノス¹⁴が眺めるような目で 眺めていた。 60
 「また 彼らは しばらくの間 セント・ポールの
 「学究的な神学校の前で 留まることも忘れはしない。

¹² [訳注] 原語は“St. Dunstan”: ダンスタン (909?-88) 英国 Canterbury の大主教; 英国の僧院制度の改革者。

¹³ [訳注] 原語は“Erskine”となっている。恐らく John Arskine (1509-91: スコットランドの宗教改革者) だと思われる。

¹⁴ [訳注] 原語は“Galen”: Claudius Galen (ガレノス、ガレヌス、ガレン: 129-99: 古代ギリシャの医学者: Galien と綴る)。

「ここでは リリーの文法書¹⁵が 韻文で
「<男性への適切な>¹⁶を 繰り返していた。
「チープサイドの端っこには 壮麗とまではゆかない 65
「巨大な移動舞台が 立っているように思われた。
「それから 四列丁の紙が <連>の上に また<連>を重ね¹⁷
「ある広大なそして巨大な岩のような姿をして 目の前に現れた。
「その硬い土台の上には ある人物像が立っており
「あれは 真鍮と木材の合成物であった。 70
「その周囲には <月々>と<週間>たちが立っており
「その手に 聖書だの 歴史書だの 批評書だの
「また 詩の女神たちより送られた 雑誌の数々を携えており
「それらは 様々な色彩で描かれた覆いをつけられ
「蒼緑と赤色と 褐色と青が特に目立っており 75
「その形・姿は 皆 お仕着せの上着を身につけていた。
「その顔は 微笑むでもなく かと言って 洗面でもなくて
「巨大な太鼓腹を 突き出して ハムと豚の尻肉が
「詰め込まれて太っている— そんな感じであった。
「彼の頭上には 二つの印刷会社の<悪魔たち>が 80
「緋色のキャンバスを 大きく広げ
「その上には 装飾文字で 大きく書かれていた
「<パタノスター通りの天才>と。

¹⁵ [訳注] 原語は“Lilly’s Grammar”となっている。Lilly は文法学者 William Lilly のことであろう。

¹⁶ [訳注] 原語はラテン語で“Propria quae maribus”となっている。

¹⁷ [訳注] この一行は、原文では“Ream upon ream of quire stock”となっており、いずれも<製紙業>に関する用語が使われている。『新英和』によれば、“ream”については「<製紙>：連(れん) 普通は 20 quires=480 枚、新聞紙ではムダを見越して 500 枚、印刷用紙は 516 枚」とあり、また“quire”については、「四列丁(四紙葉を二折にしたもの)」、また“stock”については、「<製紙・印刷>(ある種類の)紙、在庫紙」とあり、いずれも、その訳語を釈用した。

- 「^キロンドン^ド市^{ホー}庁舎の 強大な巨人たちが
 「共鳴する呼びかけに急き立てられて 85
 「時計が一時を打つのを 耳にするや否や
 「その持ち場から 下へと降りてきた。
 「そして チープサイドで 古典的な一群に
 「敬意を表して 整列をした。
 「しかし 彼らが 時計の二時の音を聞いたとき 90
 「いつもの習慣のように 後退していった。
 「さてさて 彼らが 古宝石商の近くやってくると
 「まるで <愚鈍>が捏ねられて<怨霊>となったかのように
 「野暮ったい姿・形のものが 現れて
 「一号とか 二号とか 書かれた翼を広げて 飛んでいった。 95
 「また 他の項目には 四ペンスは 一グロート¹⁸に値する
 「などと 当たり前のことが 指示されていた。
 「それから それは 更なる通路を塞がれた
 「沢山の群衆の流れを 導いてゆくように 思われた。
 「直ちに彼が現れて 和平を告げる旗として 100
 「^{フランク・シート}白紙の帳簿を 取り出して見せた。
 「そして 彼のそばでは 二つの風に舞うパンフレットが
 「様々な姿・形をした図像で覆われた 旗を掲げていた。
 「そして 飾られた鉛筆たてが 一者に色を添え
 「株の価格が 他の一つを 照らしていた。 105
 「価格査定の守備隊衛兵と
 「利子一覧が 大胆な独白をするために
 「近寄ってきた 彼らの指導者の周囲で
 「その持ち場を占めた。
 「しかし 彼がおしゃべりを始める前に まさに 110

¹⁸ [訳注] 原語は“a groat”であり、「昔の英国の4ペンス銀貨（1351-1662）」のこと。

「シティーの諸力を描写するのが 私の話の順序というものだ。」

「請求書と現金帳簿が まず 先陣を切りのだが
「それらは 活発な そして数限りない一族である。
「そのあとに新聞雑誌が付いてくる それらの技倆は
「日々の訓練によって 鍛えられている。 115
「そして その両側には 掛売勘定書きと 為替手形と
「銀行小切手の山が 並んで現れ この三種のもの
「軽歩兵隊として 匠みに操られているのだ。
「他方 駐留部隊とも言うべき 多くの書物は
「定期的な お定まりの場所を占めている。 120
「そして ^{プロットイング・ベイパー} 吸取り紙の束が つっ立って
「流れる血の一滴一滴を 吸い取っている。
「そして ^{レジスター} 元帳が 主体を形成しながら
「襲い来る嵐に備えて 武装を施している。
「その重量たっぶりの姿・形は これみよがしに 125
「敵に対する がっしりと固められた密集方陣を 示すことができる。」

^{ディスコード}
「不和が 卑しい意図を持って
^{てきがいしん}
「敵愾心を煽るために 現れる。
^{マーズ}
「軍神が 戦争に出かけるときは 常に
「彼の戦車を先導する あの不和ではなくて 130
「^{リチゲーション} 論争なる名前によって知られる
「異なった地位と国に属する不和であって
「^{よこしま} 邪な弁護士の机の上で生まれ 他人を
「^{いじ} 虐めては 当惑させるよう育てられ
「ただ 論争だけが 生きがいときたもんだー 135
「訴訟以外に何の興味も示さない者。
「彼女は 鷺鳥の羽根の上で ふんぞり返り

「あなたの経歴を調査し 罰するために
「強大なる軍隊が 今 ここで あなたを待っていますぞ。 160
「私は 争いと災害を恐れられる私のご主人たちに
「あなたに 急いで 回れ右をさせ
「ロンドンの大通りから 姿を消させよ と命令を受けている—
「さもなければ こちらから 直ちに追放するだろうよ。
「我が名は コッカー。その名は 165
「町の あらゆる取引所でも 知られているですぞ。
「いいや 私の効用と評判は 結構良いものだから
「国中で知られていると言っても 過言ではないだろうよ。
「そうなのだ 私は この 今喋っている私は
「何を隠そう 金銭算術の父親なのだ。 170
「つまりは あなたのギリシャやローマの子孫たちを
「遥かに凌ぐ一民族の その源である。
「さあて 私が求めるものは 直ちに
「あなたが 慎ましい返答を 返すこと—
「そうでなければ 激しい攻撃に晒されるだろう。 175
「私は 二を二度数え それから それに四を加える
「あなたに与える時間はそれだけそれ以上は与えませんぞ。
「一、二、三、四、五、六、七、八！
「数え終わった これ以上は待てません。」

「パラス・アテーナーの鳥は 英語も
アッティカ訛りのギリシャ語も 180
「十分に 話すことができて
「その場に合わせて形で 時間を延ばさずに
「俗語で 返答をした。」

パラス・アテーナーの梟

「それは あなたの国の商売人たち幾人かが
 「正式に提出した 依頼であったのだ。 185
 「我が主人様に 少しだけ 知恵を買わせて頂けないか
 「普通の規則には反するのだが 少しだけ
 「学問を ここに輸入させて頂けないか
 「そのような事を 嘆願するものであった。
 「私は 彼らの意志がどうあれ 名声を得ることが目的ではないし 190
 「また十パーセント²⁰の利益に預かることが 私の狙いでもない
 「それが 良い知恵であれ 悪事であれ
 「また 彼らが 良い方に転ぼうと 破滅に至ろうと
 「または 市民的な常識の結果として そうなろうとも。
 「或いは 抜け目のない 金銭目当ての装いだとしても 195
 「そして 彼らを旧式の諸規則から逸脱させる
 「利害心とか 傲慢さ であろうとも。
 「古い諸規則は かの不滅の乙女²¹への貢物に対してでさえ
 「税金をかけて 値段を釣り上げる結果となる。
 「そのような事柄は 自由に言わせてもらえれば 200
 「ミスター・コッカーよ 私にはどうでもよいことなんだ。
 「いずれにせよ かのミネルヴァ²²様の尊いご命令によって
 「私は この古典的な一隊を 引き連れているのだ。
 「指示するは 彼女であり 従うのが我々という訳だ。
 「我らの行く手を あなたに ^{さえぎ} 遮らせはしない。 205
 「それが あなたの喜びに繋がろうと

²⁰ [訳注] 原語は“*ten per cent*” (イタリック): 以前は、依頼者の収入の10%を報酬としてもらう習慣があったことから。

²¹ 「不滅の乙女」これは Pallas Athena のこと。

²² Minerva: (ローマ神話) 工芸、芸術、戦術、知恵の女神ミネルヴァ。言うまでもなく、ギリシャ神話の Athene に当たる。

「そうでなかろうと その研究所へ 我らは 行く途中なのだ。
「あなた 計算づくの 卑しい人よ。
「あなたの国の 卑しい生まれの書物たちは
「この勇壮なる軍人たちに比肩しうる 何があると言うのか。 210
「この<押し合い>は そしてその<へし合い>は 何なのか。
「彼らが 私たちと 争うことが出来るとでも？
「卑しくて 欲望丸出しの奴隷 ポンドやペンスや
「シリングすべてのものの 奴隷たる 彼らが。
「ペンが与えるがままに 彼らは インクが滴り落とす 215
「金銭というひと雫^{しずく}を 飲むよう強いられているのではないか。
「そして 腹が満たされれば 彼らの生命も そこでお仕舞い
「台所の火を炊きつける そんな役にしか 立たなくなる。
「或いは 蠟燭商人や 呼び売り商人が 選ぶがままの
「そんな落ちぶれた目的のために 引き渡されるのが落ち。 220
「もし それらが 我々の規定された道に対抗するのであれば
「我々は それらを 明るいうちに掃き去ってしまうであろう。」

「同時に 我々は 和平をも求めているのである。
「そして あなた方の無礼な扱いも お仕舞いになることを。
「また 頭脳の良さをひらけかす希望があつて 225
「シティーを 嘲笑する積もりもない。
「我々は 教養という力を 運び込んで
「シティーそのものが瞑想する時間帯を 邪魔するのでもない。
「また 詩的なヴィジョンがあつて あなたたちの
「利益と損失の見積もり書を 妨害する訳でもない。 230
「我々は あなたたちが読めもしない書物を持ち込むことで
「<行動せよ>と 最初に 教示した訳でもなかったのだ。
「諸々の会合は果たされ 演説は 成された。
「商売の重鎮たちにより

- 「未知のものであった願望も 生み出され 235
 「そして 確実に 我々は 最善を尽くしてあげた。
 「我々は 古典の書物それぞれを提供し
 「対訳の形で 翻訳もしてやった。
 「ドライデンは ヴェルギリウスの全作品を
 「英語による韻文で 反芻する準備が 出来ている。 240
 「そして ギリシャ語のホメロスは ポープによって
 「理解されることを 望んでいる。
 「リーランド²³は お望みとあれば
 「デモステネス²⁴の演説を あなたに与えてくれるでしょう。
 「スコットランドのガスリーは キケロの雄弁を 245
 「与えてくれる筈だ。
 「トーマス・スタイルズとジョン・ア・ノークスに対して
 「カーは 老ルキアノス²⁵の冗談句を 繰り返すであろう。
 「他方で ユウェナーリス²⁶の鋭い風刺は
 「ウィリアム・ギファードの 対抗詩行のなかで 輝くだろう。 250
 「コールマンとソートンは ラテン語劇に対する
 「正しい評価を 広めてくれるだろう。
 「古代の批評家たちが 何を書いておろうとも
 「今は 平易な英語で 引用することも出来
 「ボトルを傾けながら 英語化された
 「アリストテレスのために パイの健康に乾杯することも。 255
 「それだけでなく 古代の詩人たちが歌った歌すべて

²³ [訳注] 恐らく John Leland (1506?-52: 英国の考古学者) のことだろう。

²⁴ [訳注] 原語は “Demosthenes”: (384?-322 B.C.: Athens の政治家で雄弁家: 反マケドニア派の中心人物)

²⁵ [訳注] 原語は “Lucian”: ルキアノス (120?-?80: シリヤ生まれのギリシャの風刺散文作家)

²⁶ [訳注] 原語は “Juvenal”: ユウェナーリス (55?-?140: ローマの風刺詩人。)

「今や 俗語で 歌うことも出来る。
「我々に それ以上 何が出来よう。だから 争いは止めるべし。
「そして 我々を 静かにお通しなされよ。
「そして 勘定講座への行列を 今 やめて 260
「煩わしい 商売用書物など 追放しなさい。
「そして それらの書物どもには 再び書棚を放浪させ
「インクを啜らせ 自宅に留まらせなさい。
「二度と再び 威嚇でもって ギリシャやローマの敵と
「対抗するような そんな姿勢を取らせるでないぞ。」 265

コッカー氏

「このシティの内部にも 外側にも
「馬鹿者どもが わんさといふことは 疑いえない。
「これは 本当に 真実のことなのだ
「つまり あなたをここへと連れてくる馬鹿者たちだ。 270
「どうか このあくせくと働く都会人たちに
「英知が 如何なる関係にあるのかを 教えて下され。
「英知については 私たちは 利益の何パーセントなどの中に
「見出されないならば どういう意味は 分からない。
「勉強することは いつも<麻薬>みたいなものだったから。
「如何なる倉庫係も 決して飲みはしないだろう。 275
「如何なる熟練の織物商人が ギリシャ語を眺め
「ラテン語を慕って 彼らの繻子を手放すだろうか。
「威勢の良い 駆け出しの 商人の若造が
「ロンドン塔を見て トロイのことを考えるだろうか。
「民主主義育ちの帽子屋が 280
「古代の共和国について 話題にするだろうか。
「キケロが設定した諸規則に乗っかって 会話をするために
「町のお喋りやどもが 彼らの道具を手放すというのか。

「市庁舎の会合の席で 古典的な論争でもって
「烏合の集を 誰が当惑させるというのか。 285
「見栄を張って そのような事柄に対処する者は 誰もいないのだ。
「というか 彼らには 常識というものに しがみつかせよう。
「あなたは あなたの国の古代詩人を 反芻されているが
「韻文の中には 常識など存在しないのではないか。
「あなたの尻尾にぶら下がっている古典の全てが 290
「理性の秤にかけた 一オンスの重みもないだろうよ。
「私は ローマなる名前を 軽蔑している
「レグホーンの商売業を 私には 与えておくれ。
「イタリアの 多産な浜辺から
「不可思議な学問が 運ばれて来たのだが 295
「それは 貿易にも 強大な利便を与える
「輝かしい 創作品だとのこと。
「つまり その複式帳簿は 絵に描かれ 彫刻にもされた
「あらゆる幻想に 遥かに優っている。
「確実に私に言えるのは このような帳簿図式を 300
「思いついた精神の持ち主の 名誉ある名前こそ
「制服者の剣によって打ち負かされた者以上に
「運命の女神の 輝く花冠を被るに値する人なのだ。
「例えば ギリシャ人は 取引について 何を知っていたのだろうか。
「噂を聞いたのだが ユリシーズは 305
「彼の船荷を 故国へ持ち帰るのに
「たっぷりと十ヶ月は 放浪を余儀なくされたとか。
「その同じ海を航海するのに
「我らの沿岸貿易帆船ならば 三ヶ月で済ますであろう。
「小売商社は 商売用の 単なる安ピカの 310
「小細工品が 飾られて
「壮大な人の行列で 真実のところ 飾られているのみ

「そこに あなたは 贈賄者としてやって来ては
「我らの 財布を自慢する都会人たちを 屈服させて
「十パーセントの 利益配当という 315
「彼らの主な関心事を 助長させている。
「なる程 我々にも 学者ぶる商人がいて
「まるで 何ほどかの知識があるように 話をし
「学問という<ガム>を 噛んでいる振りをしている。
「彼らは 偏狭な語彙しか持たず 雑誌や 320
「評論のなかで 詩の女神に求愛をしているだけ。
「然り 我らの中には その几帳面な情熱が 書物を読むことに
「あるのではなく 表紙のタイトルのみにある人たちもいる。
「彼らは 宴会を開くときには 人の心を惹きつけるような
「アルコールとステーキ肉には 金を惜しまない 325
「それがミンシング通りとフィルポット通りへと
「アッチカ風に列をなす連中を 惹きつける訳なのだ。
「そして 彼らはご馳走だけを掠め取り すぐに立ち去り
「その日のパトロンを 嘲る始末だ。
「また 精神内部が すべて学識で充滿していることを 330
「他人に 理解させようと 必死の努力をする輩もいる。
「残念なことは 例え少なからぬ学識があろうと
「その学識がアダとなり 取引を台無しにする有様なのだ。
「いつかやがて 相当の金銭で囲まれる
「そのような日が 彼らに訪れるかもしれないが 335
「しかしながら 手短かに言えば まずは己れの名声に相談し
「来た時と同じように 重々しい顔つきで 帰りなさい。
「さもないと こちらから 直ちにあなたを送り返すだろう
「あなたが例え傷を受けても 膏藥さえ 提供せずに。
「空中を舞い 何かの前兆を告げている 340
「星のように輝く ほら あの姿を見てみなさい。

「それは 評判の高い 商業の騎士を示す
「紋章付きの象徴であり それが輝いている姿なのだ
「彼は 商人の名に相応しい名前以外に
「いかなる優れた名声をも 求めたことはない。 345
「見てみなさい 世界の市場の上で
「彼の旗が いかに 風に翻っているのかを
「そして 威嚇するよう^{おぞ}な悍ましい顔つきで
「あなたの梟崇拜と あなたの仲間たちの行動を眺めているのかを。
「その動作のなかに 我々は 350
「確実な勝利の 前兆を見るのだ。
「そうだよ 私は 勝利を見積みながら
「四タス四が八となるのと同じくらい それを確信しているのだ。
「こうして 私は 誤差は差し引いて 正当な収支決算の
「全あらましを はっきりと 述べたのだ。」 355

パラス・アテーナーの梟

「ミスター・コッカーよ。あなたの知恵が好んで話すすべてを
「私は 聞いてきた。
「そして その中で そのような数が育まれた
「あなたの頭を回転させることを 進言したい。
「あなたのキリギリスに その尻尾を巻いて逃げ出させるような 360
「ある種の風が吹いて 勝ち誇っているのを見てみなさい。
「その風のなかから 私の賢明なる預言者は あなたの
「その大義名分にとって 致命的な前兆を突きつけているのだ。
「彼が こう言っているのが聞こえるだろう—
「『お前の仲間の間抜け連中も 同じことをやるだろう』と 365
「しかし おしゃべりは 役に立たない—
「従って 和平決裂だ 直ちにな。」

- 「昨今は 批評家たちも 決闘に呼び出されたら
「ありふれた燃料をば 軽蔑し
「一撃の弾丸などで 空威張りしないで 370
「インクで傷を与え 紙切れで殺害する傾向にある。
「両陣営共に 過激な争いを求めて
「かく <威嚇戦争>が 始まった。」
- 「ユークリッドが コッカー巨匠に飛びかかり
「一撃のもとで 彼を なぎ倒す。 375
「そうして 解きほぐし難い難問で 彼を縛り付け
「出会った現場で 彼を もがくがままに任せる。
「次には カエサルが ラテン語を煌めかせて
「快活な一隊に襲い掛かり 彼らを痛く殴りつける。
「それから すぐに 決して支払われることはないと思われる 380
「勘定書きを巡って 激しい大混乱状態を作り上げる。
「他方で 銀行家の小切手は 素早くその場を退いて
「ロンバード通りへと すり抜けて行く。
「そして 対等の力でもって ギリシャ人たちが攻撃をしかけ
「重装備兵たちを 後ずさりさせる。 385
「会計元帳も雑誌類も すべて 散乱させられたまま
「請求書帳簿も現金帳簿も はね散らされていた。
「争いは長くは続かず 恐れに戦いて
「困惑したまま シティーの諸権力者たちは 逃げ去った。
「援助を求めて 彼らは出版業者を訪問したけれど 390
「彼らは 事務室で 忙しげに仕事をしていた。
「そして 彼らの同業組合は
「この事務室こそ 一種の中立地帯と分かり
「想像するがままに 成された大混乱こそ
「製紙業に奉仕するだろうと 考えた。 395

「彼らは どちらかの側に与するのを忌み嫌い
 「両者から 同時に利益を得ることのみを 願っていた。」

「さて 郵便配達人が ラッパを鳴らすが
 「そのひと吹きも虚しく 全然役に立とうともしない。
 「**信書控え帳**も 無秩序状態で 飛び散る。 400
 「方や **ピンダロス**が **ボウ教会**²⁷の尖塔の時計から
 「下を見下ろし その衝撃的な光景を見るや否や
 「大きな 元気づけるような調べを歌ったのだが
 「それは 無駄に終わることなく 一つの効果を齎した。
 「**銀行**から 三、四、五パーセントの利益軍が 405
 「派遣されて 出てきたのだが
 「しかし 彼らは逃げ去り 手を打つことはしなかった。
 「というのも その日の**株式**は 低調で
 「**政策軍**も 安泰という有様で
 「ただ 署名する手を 待っているのみだった。 410
 「というのも 下書きするものもいそうにない時に
 「いかなる魂が 勇敢にも 彼らと戦うのを望むであろうか。」

「そして 今 この豪胆な都会人たちも 打ち負かされ
 「凡ゆる細路地 凡ゆる大通りを 右往左往しては
 「**銀行**の玄関の前で 切れ切れながらも 415
 「隊列を作るために 合流した。
 「そして そこで 協議会を開き 論じあった—
 「新たな力を得て 大胆になって
 「新たな戦いに挑むべきなのか

²⁷ [訳注] “Bow Church”: London の中心にある教会で、この教会の鐘の音が聞こえる範囲で生まれた者が生粋のロンドン子 (Cockney) とされていた。

「または 解散して こそこそと 家路につくかを。」 420

「こうして 古い**古典隊**は 野卑な敵を打ち負かし
「**コールマン通り**へと 進んで行く。しかし
「通過している際に **クーパーズ・ホール**には
「多くの軍勢が 駐屯していた。
「二人の青いコートの若造が 横笛を吹いており 425
「好戦的な争いへと 彼らを誘っていた。
「その時に 彼らは 尖った矢とか槍を投げるのではなく

「その古代人たちに <偶然>というものを 投げ続けた。
「しかし 常に盲目である**運命の女神**は
「幾分無愛想になり 一行の者たちを置き去りにした 430
「従って 指導者を失った彼らは そとと逃げ出し
「**運命の車輪**^{ザ・ホイール}のなかに 己れの額面^{かく}を秘すのだった。」

「最後に この古典の聖者たちは
「彼らの**パルテノン**の隠れ家に 挨拶を送る。
「しかし 周囲の 笱する壁が 435
「**イオへの讃歌**²⁸で 反響する時に
「再び 復讐心に満ちた敵たちが現れて
「怒れる軍旗を 高く掲げる。
「『もう一度 我々は』と古代人が言う。
「『この血迷ったような 商売の餓鬼どもを
やっつけなければならぬのか。 440

²⁸ [訳注] 原語はイタリアックで“Io Paenans”となっている。“Io”は、ギリシャ神話で、Argosの川の神Inachusの娘。Zeusに愛されたので、Heraに妬まれ白色の雌牛に変えられた、よいう。

『制服することさえ 不面目な時代に 戦争から
 『我らの民族を守る力もないというのか』
 「ギリシャ人たちは それからポーソン²⁹の名前を呼び
 「ローマ人たちも その名を笈させる。
 「すると ギリシャ風の緩やかな外衣を着て
 「森厳なる亡霊が 現れる。
 「ホメロスは 膝まづいて 額き
 「悲劇詩人ソフォクレスも <価値>という語で終わる
 「全ての名前を綴って 膝まづいた。」

445

「『ようこそ 聖なる書物よ』彼は言う。『あなたに
 『私の知る全てが依存していること それを感謝申したい。
 『あなたから 私の儂いとはいえ この名声も
 手に入れることが出来ました。
 『即ち 一介の学者という名前をです。
 『そして あなたゆえ 私の この不滅の力はあるのだし
 『人々に それでもって 助力を授けたいのです。
 『私は あなたあてに文書を書き付ける人たちの住む
 『かの 天上の大広間から やって来ました。』
 「彼が そう言うのと— 見よ 一冊の書物が
 「巨大な大きさと 悲しい名前を携えて 現れた。
 「その背中には 文字による題目は 備えておらず
 「過ぎ去った昔の 沢山の日付けのみが 書かれていた。
 「そして 文字が刻まれた側面には
 「敵に直接見せるように <五十年間のロンドン官報>
 「と書かれていた。それが 高いところで

450

455

460

²⁹ [訳注] 原語は“Porson”: 恐らく Ricgard Porson (1759-1808: 英国の古典学者) のことであろう。

「近接する 凡ゆる屋根の周りで ひらひらと舞い 465
「一ページ全体を 開いては
「“Whereas”³⁰ という文字を見せていた。そして叫んでいた『見よ』
「かつ一方で 多くの壁の上にも 同じ文字が書かれ
「燃えるような大文字で ギラギラと燃えていた。
「“Whereas” と 無数の声が唱和すると 470
「上空の方へ 翼に乗って ひと繋がり荷札が
「舞い上がり 署名をされていない
「恐ろしい証明書と合体してしまった。
「これらのものは 敵に直面し 恐怖で冷やされて
「震えながら 金切り声をあげ 逃げ去ってしまった。」 475

「さて 亡霊は 視界から消え去っていました。
「アテーナーの鼻も消え失せていました。
「そして 私は 古典的の妖精たちが
「そこで 誰にも邪魔されず 教養豊かな書物の一冊一冊が
「運命の日まで 休らうことの出来る 480
「己れに相応しい書棚を 本能的に求めたのだと考えました。
「そこで 私の夢が覚めた訳ですが この目覚めの際の
「勝利感に 真実の喜びを感じました。
「そして 貧しいながらも この私の古典の学識を
「生きてゆくのに 絶え間なく疑いを抱き 恐れながらも 485
「気の進まない 不安な取引が与えてくれる
「凡ゆる蓄えと 交換するようなことは したくありません。
「私の財宝は 全て 安全に確保されており

³⁰ [訳注] 原文では、3行下の“Whereas”と同じく、飾り文字(?)で、~~Whereas~~のように記入してある。
『新英和』には、「(“whereas”という語で始まる)但し書き [制限] 条項」とあり、ここでは、その意味を採用したい。

「それらに 保険をかけるようなことは 望みません。

「私のギリシャ語とラテン語は 私の頭のなかの

490

「倉庫のなかに 閉じ込められていおり

「その中で 安全に 居続けることでしょう。

「私の わずかながらの船荷も 家に停泊させられており

「そこには 大風も嵐も やってくることはありません。」

「学問は 混ざりけのない純粋な快樂を 齎し

495

「金で買うことも 商売で測定することも出来ないものです。

「そして それぞれが 自分の定められた持ち場に 留まるのです。

「学問は 私の誇りでもあり 慰みでもありますし

「美しく作られた 魂の同居人でもあります。

「そして それは 季節が移り変わるにつれて

500

「新たな力を獲得しては その力を保存し

「人生の究極の場面で 微笑みかけてくれるのです。

「学識ある人は 彼を野次る人があろうとなかろうと

「常に そのような喜びを 彼の周りに運んできます。

「そして 万が一 学問を怠るようなことがあって

505

「錆び付くようなことがあっても 彼は それを失うことはないでしょう

「**運命の女神**も 愛撫するのを放棄することがあるかもしれませんが

「彼女も 学問が与える祝福を奪い去ることはないのです。

「金銭は 極めて多くの慰安を与えてくれるでしょうが

「金銭を求めて生きている人に 尋ねるがよろしいでしょう—

510

「あなたは 貪欲さの快樂と 黄金への配慮以外の

「他の喜びを共有出来る人があるのか どうか と。」

「私は 何としばしば 山査子の繁る東屋のなかで

「夕暮れどきを 過ごしてきては

「**ヴェルギリウスの<農耕詩>**のなかで光り輝いている

515

「魅惑的な詩行を 大きな声で 朗読してきたことでしょう。

「そして 富が 堂々たる装いで 傍らを通過するとしても

「心を疼かせるような嫉妬の念が湧き上がるのを
感じたことはありません。

「また その光景が 永遠の詩人のページから

「私の心を 逸^そらしたこともありません。 520

「いつものように 人通りの少ない道路に沿って

「私有家路に向かって彷徨うとき

「散歩しながら 恍惚となつては

「フィロメラの タベの歌に聞き惚れては

「世間の人が 絶対に味わえないものを 感じるのです。 525

「人間的な悩みの全ての忘却とでも 言うのでしょうか

「そんな時間は滅多にないのですが ただ 学問が

「そのような時間を与えてくれる— それは確実なことなのですね。」

我が閣下は 議論を続けられたが

時間は 愉快なおしゃべりのなかで費やされ 530

深夜が その親しい対談を 壊してしまった。

第二十六曲

成功という名の冠を被り 次の日

博士は 懐かしの帰路についた。

そして 翌朝は 再び 愛するグリズルの背中に跨り

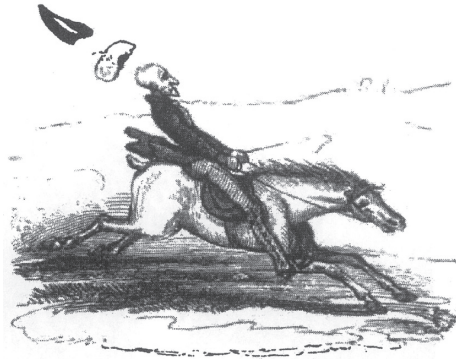
平原を 横切って行った。

しかし グリズルは 安楽に暮らしてきたがゆえに 5

心の内側では 一度ならず この深い瞑想に耽るご主人を

振り落とすような兆候も 示ささえた。

おまけに およそ半日ほど 歩き進むまでは
己れが 道に迷ったことなど 気付きもしていなかった。
同時に その瞬間までは グリズルが ある偶然の不幸で 10
その耳と尻尾を どこかに置き去りにしていたことも 気付かなかった。
「いいかい 気にするでないよ。可愛い奴よ。」彼は優しく言う。
「お前の頭を飾る耳が無くても 大したことではないわいな。
「お前のお尻が むき出しの切り株みたいに萎んだとて
「お前の名誉が 損なわれるわけでも ないからな。 15
「さあ 財布も心も上機嫌な私ゆえ
「必ずや お前の功德に報いがあるようにして進ぜよう。」



次の一日を 彼らは 終日旅し続け
次の日には おお 見よ 見事に旅は果たされた。

おっと、言い忘れていたことがあったっけ。 20
数日前のことだった。 一通の手紙を書いていた。
「私は すぐに帰宅するだろう
「そして最愛のお前を再び抱きしめたい」と。
しかし 己れの 旅路での幸運については
これといった一言も 書いてはいなかった。 25

「そうなのだ 家は家なり。それがどこにあるうとも。
「通りすがりのよそ人の目を捉えるほどに
「高い建築物が 聳えていようとも。」
そのように考えていると 突然に 門のところで
愛するドルが 痺れを切らして待っているのが見えた。 30
大通りを通過する際にも
群衆に注目されないわけにはゆかず
ある店先にあっても 扉や窓ごしに
彼の姿に 目を向けない者はいなかった。
博士は 奥方にキスをしては 重々しく語るのだった。 35
何か冗談でもと 思いめぐらしていたがゆえに。
かつ他方では 奥方は どれくらいの金額の報いを彼が得たのか—
それのみを知りたくて 心をウズウズさせているのだった。
「パイプと それと ビールをおくれ」彼は言う。
「そのうちにゆっくりと話を聞かせてあげようぞ。」 40



彼は腰を落ち着ける。タバコをふかしながら
悲しげな顔をして 一言も言葉を放たなかった。
そこで やがて奥方が 話を切り出す。
それは 不協和音で次のように流れた。

45

「あなたの当惑なされているお顔を見て思うのですが
「ご自慢だった書物は とうとう書いておられない
「大事なお金もゼーんぶ お使いになり
「出発なされた時よりも 余計に貧乏になって帰宅されたみたいですよわね。
「そうですわ 家から離れて はるばる旅をなされ
「今は 乞食の身となって 帰ってこられた。

50

「あなた様に 悩みを与えるかのように
「いろんな方面からの勘定書きが 待っていますよ。
「あなた様をお叱りし 愚痴をこぼす積もりはありませんが
「牢獄で あなた様と一緒に生活するのだけは 御免ですわ。
「余りに長いこと よそにいらしたものですから
「この町の副祭司様に お支払いしなければならぬことが生じています
「家から離れて あなた様が 馬鹿を演じなさっていたあいだ
「あのお方が ご親切にもやって来られ 生徒たちに教育を施されました。
「子供たちを 鞭打ちながら 勉強させ

55

「わずかながら お金を手になさせて 喜んではおりましたが。
「でも ちゃんと言わせてもらいますが 馬鹿なあなた！
「あなたは 自分のお身体に 自ら鞭を打つ—そうされて当然でしょう。
「そうして その鞭が 怠惰なあなた様の貧弱な背中で
「パーンと弾けたらいいなとも思っています。

60

「さあ 煙草はふかしておしまいなさいな。私の心配事は
「煙となって消え去るような そんな冗談の種ではありませんからね。
「押し黙れる間抜け屋さん。仕立て屋の女将さんには
「どう言い訳をなさるお積りですか。その素晴らしいご衣裳の請求書に

65

「どなた様が お支払いをなされるのでしょうかね。おお 忌々しいこと！
「それ 二十ポンドかそこらの高額ですわ。」 70

このように 奥方が激しい勢いで怒鳴っているあいだ
博士は 小言を言いながらも 心の中では楽しんでおり
上着の小さなポケットから
気づかれぬように 一枚の小切手を取り出しては
それをテーブルの上に ポンと置いた。 75

彼は言う。「いいかい お前。 その衣裳作りの女将さんを
「黙らせておくことが 今や 我らにできるのだよ。
「だから いいね この虚しい騒動は 止めにしないかい。
「もし お前が そのように取り乱しさえしなければ
「私は 静かなる心持ちで お前をもてなしてあげるのだがね。 80
「優しい心でいておくれ。お前を喜ばせることくらい
「さほど大きな仕事とは 思ってもいないよ。」

奥方は 意表を突かれる形で 大きな喜びの声をあげ
両腕で しっかりと博士を 抱きしめた。
そうして 子供たちのほうへ駆けてゆき 万歳を唱え 85
子供達 全員に 休暇を与えた。

「これが結婚生活というものだ。」
シntaxは言う。「私の愛するは 妻のみ。
「先程までは 馬に鞭を喰らわせることで 苦勞していたが
「今は 抱擁されて 窒息しそうだわい。 90
「しかし たとえいかなる場所を彷徨う運命にあろうとも
「私は常に言うだろう一家こそ家なのだ と。」



再び 可愛い奥方は 愛撫を重ね
愛情溢れて 彼を胸深く かき抱^{いだ}いた。
こうしながら やつとのこと 愛の戯れのなかで 95
博士は 言葉を放つ時間を持った。
「たっぷり太った子牛を このシタックスの帰宅を祝い
「お前は 始末をしていると思うが—」
「いえ」彼女は答える。「太った子牛ではなく
「その半分でも それよりは良いものを準備していますよ。 100
「あなた様のご帰還に対しての 大きな期待と喜びを抱いて
「一頭の子豚を 殺しています。
「今 火に懸けている豊かな臍物も
「あなたが望むすべてを 提供してくれるでしょう
「私自身は そのぴりっとした味の肉塊に 焼き汁をかけ 105
「愛する<旦那さま>のお好みに それを合わせましょう。」
博士は叫ぶ。「その料理こそ フリカンドーヤ

「フリカッセ³¹以上に 私が目にしたいものだ。
「おお！」と彼は続ける。「このようにも下ごしらえ³²が好きな
「そんな妻を持って なんたる神様のお恵みだことぞ。 110
「お前は 高尚な趣味と技術でもって
「己れを着飾ると共に 豚肉をも着飾らせる³³とは。」
そうして 奥方は 家政的な配慮に戻って
美味なる夕食の準備に 精を出した。

シントックスを追いかけて その旅行について行き 115
怠惰な時間を過ごした人があれば 誰でもが
彼が 話しかけたいと願うときには その彼は
「空想」でさえ避けはしなかったと 認めていたに違いない。
そればかりか 一人ぼっちの時さえ 彼が
長い演説をする傾向が しばしばあったことを。 120
そして 今 身体を火照らすビールを飲んでいる間も
グラスを替えるごとに 物語を語るなのであった。
或いは 煙草を吹かしながら 目を半ば閉ざして
あるときは微笑み あるときは 賢そうな顔つきをして
彼は 冗談を飛ばしたかと思うと 道を説いたものだった。 125
そして このような奇妙な靈感が彼を襲ったとき
聴く者がいなくとも 彼が気にするところではなかった。

³¹ [訳注] ここは、原文はフランス語で“fricandeau”と“fricassee”となっている。『ランダムハウス英和』によれば、“fricandeau”は「子牛の腰肉をラードで包んで炙り焼きにしたり、とろ火で煮込んだり、蒸し焼きにしたもの」、「fricassee」は「鶏または子牛の肉などを軽く炒めてから蒸し焼きにして、その肉汁を加えたホワイトソースをかけたもの」とある。

³² [訳注] 「下ごしらえ」と訳した原語は、“dressing”であり、(1)「(衣服の) 着付け」と(2)「(料理の) 味付け」の両義一掛詞となっている。

³³ [訳注] この行の二つの訳語「着飾る」「着飾らせる」は、上の註の内容を引き継いでおり、いずれも、“to dress”という動詞が使われている。

次のようなことを喋った—すぐにお目かけよう。
彼は語ったのだ 誰ひとり聴く人はいなかったが。
煙草の煙が通過するなかで 沈黙を打ち破り 130
次のような考えが浮かんでは 一服し そして こう話した。

博士の喫煙中の独白

最善のものから 最悪のものを生み出す人は
二重に 呪われていると 断言する
最悪のものから 最善のものを生み出す人は
二重に 祝福されている 確実に。 135
座って 悲しみ ただ嘆くだけ— それは
苦痛に 更に愚行を付け加えるに等しい。

逆境にあっては 臆病心以上に
有害な悪徳はない。
キリスト教徒の立派な名前を 140
主張するのは 抵抗の力による。
もし そなたが抵抗さえすれば 年老いたニック³⁴でさえ
考え抜いた策略を 放棄するのだ。
幸運の女神は めそめそする奴隷を軽蔑し
勇敢な者に微笑むのを 愛する。 145

人生行路で 我らが出会う
斑まだらもよう模様の 争いのなかで
我らが追求する対象が何であれ
常に勝ち誇る何かがある。

³⁴ [訳注] 原語は“Old Nick”であり、これは「悪魔 (Satan)」のこと。

他者の胸であらうと 己れの心であらうと 150
ある敵がいて 悲しや 悪へと傾斜する。
高貴なる心をもって **運命**の洪面に
敢然と立ち向かう人のみが 真の英雄。
その人は 威嚇する嵐が襲ってくる時
また 雲が荒れ狂う俄雨のなかで弾けるとき 155
また 雷光が 大空を横切って光るとき
また 雷鳴がそれに合わせて怒号するとき
その人は その光景にも静かに対応し
その人は 怒れる嵐に怯えたり 嘲笑したりもしないのだ。
その人は ^{ヘルター・スケルター}あわてふためいて 一時凌ぎに 160
走り出して 隠れ家を求めたりもしない。
また 故郷から遥か遠くに在るからとて
息巻いたり 焦ったり 泡をふいたりしないのだ。
というのも その人は 危険が去れば 必ずや
最後には住処が発見できると 確信しているからだ。 165

もし 些細なる悪が きみの周りに群れ集まれば
それらの騒音に振り回され 短気な気持ちにならぬよう
夏の日の昆虫のように
それらを きみの心から 一掃したまえ。

悪は 理性の力に対抗し 170
暗い 威嚇する時間を 恐れもしない
そして世界に挑みかかるのだ。しかし これが正しいことだが
天のご配慮に 己れを 委ねなさい。

もし **遺恨**と**悪意**が きみの敵になれば
獐猛なる**復讐心**が その矢を投げかければ

静かにそれを眺め その矢を恐れないう。
美德が 正直な心を 守っているからだ。 175
また きみの怒れる心に 尖った投げ矢を
お返しとばかりに 投げ返させないように。
善良な人は 幅広い 強力な 保護盾を持ち
それを使うことを 忘れはしない 180
その盾こそが 例外なく人生を悩ませる
闘争のなかで 彼を守ってくれるものなのだ。
そして 彼が最後の宿命に出会うとき
己れの墓のための戦利品を
形成しているだろう。 185

「耐えよ 控えよ」— それが
人間の知恵が かつて 胸に描いてきた教訓なのだ。
もし きみが あらゆる悩みを軽くしたければ
あらゆる悲しみに 耐えることを学びなさい。
邪悪な恥辱から 身を護りたければ 190
鑿め顔の**運命**に 面と向かいたまえ。
もし きみの敵が余りに強いならば 退きたまえ
ただし 打ち負かされた態度は取らないように。
敵の威嚇が圧倒するものであれば それを静かに避けなさい。
背中を向けることが出来るときには 戦わないことだ。 195
なぜならば きみがゆっくりと戦場を離れる時に
もし 賢明なる敵が 追跡することもないほどに
きみが 己れの 全き姿を提示するならば
きみが 卑怯者と言われる根拠もなくなるからだ。

私は 長いこと 庇護者もなく 裁定者もなく 200
一人 あくせくと働くよう 運命づけられてきた。

間抜けな連中が 威厳を持った勢力へと
のし上がるのも 目にしてきた。
私の定めは その連中の子羊の群れを 美德の道へと誘うこと
それも 一年にわずか三十ポンドを 苦勞して稼ぐだけ。 205
彼らは 子羊の群れを 悲しいかな 知らない
ただ それらが生み出す羊毛を見て 知るだけだ。
私は 苦しい学問の道に 必ず付きまとう
重たさこの上もない運命に 耐えてきた者だ。
(というのも 人間が 神の弄び者であるとき 210
(学校を經營するよう 人は 誘われるのだ。
(また その考えを 陽気なルキアノスが語るとき
(彼は 単に 冗談を飛ばしたわけでもなかったのだから³⁵。)
それでも 私は 人間の威厳を保ってきたのだし
そのように感じたとしても 決して不平など言わなかった 私は！ 215

この人生が笑劇であり 単なる幼子の遊戯であれば
富者たちは 人生を 軽んじさせよ。
私は 彼らの生をモデルにはしない
私の人生は 悩みの人生であったゆえ。

優れた精神を付与された人間は 220
所謂「群衆」なるものの 遙か上空へと飛翔するのであるが
ただし 静かな隠遁生活の 遠くの住処で
生活するのが 彼らの慎ましい運命なのだ。
或いは 運命の女神に嫌われるならば

³⁵ [原註] ルキアノスは「神々が人間を自分たちの戯れの対象にすると、彼らは人間を学校の長に変えるのだ」と言っている。シタックス博士のような男は、皮肉たっぷりなギリシャ人は、正しいと思うであろう。逆に、イートンやウエストミンスターやウィンチェスターの長たちは、多分、異なった意見を持っているだろう。

己れの糧として 学問の世界を訪問するものだ。 225
 つまり 私が送ってきたような生活を送るということだ。
 そこには 富も地位も与えられはしないのだけれど
 その生活こそが 神が選んだ高貴さそのものなのである。

その気紛れな性質ゆえに 権力者の力が
 毎時間ごとに 高貴な者を生み出すかもしれない 230
 またある王様が ただ言葉を発するだけで
 ある金持ちの木偶の坊が 貴族然として歩き回るかもしれない
 しかし 王笏を携えた 現存する権力者も
 天才の光線を一条だに 与えはしない。

天と自然が 手を携えて 235
 天才の炎を輝かせるのに違いない。
 そして 富にも地位にも関係なく
 その光が送られて 私の上で輝くかもしれないのだ。

学問よ 汝に感謝だ！苦しみと
 真夜中の油が放つ 青ざめたランプによって 240
 汝の微笑みを獲得したとはいえ。 長い歳月に渡って
 運命の女神は 我が心を元気づけるのを怠ってきたのだけれど。
 汝の靈感溢れる月桂樹の冠を被り

女神が洗面をするところで 私は しばしば微笑んだ。
 汝に慰められて 私は 櫛を通さない鬢と 245
 錆の入った上着を しばしば 忘れることができた。

石炭の値が高く 暖炉の火が勢いを弱めたとき
 私は ホメロスの豎琴で 身を温め
 愛するビールが不足するときは
 ヴェルギリウスの凡ゆる詩行を 貫いて流れる 250
 聖なる小川の水を たっぷりと飲ませていただいた。
 家庭内の口論から この身を守るときは

キケロを大声で怒鳴りながら 壁に押し付けたものだ。
私のなすことすべてが ドリーに喜びを齎さないとき
私は アリストファネスと共に笑い 255
しばしば 道の途上では グリズルに 気の利いた そして陽気な
ホラティウスからの一節を 聞かせたものだった。

世間様と 必死に戦いながらも
私の最善は 美德の生活であり それが唯一の報酬だった。
私の収入のすべてが ただ 狼が羊を餌食にする— 260
それを 防ぐことだけに費やされたにしても
決して 私は 私の古典の蓄えを クロイソス³⁶が持ったすべてや
それ以上のものとだって 交換したいとは思わないだろう。
また 仮に運命の女神が誘惑して 私の頭上に
司教冠を注ぐことがあろうとも 私は 265
読書で得たものを 失うこともないであろう。

「耐えよ 控えよ」— これぞ まさしく
人間の英知がかつて描いた 真実の格言なり。
我が生涯において このことを実践したことは
愛する妻が 証人になってくれるだろう。 270
時々 妻は がなりたて 私を叱責することもあるのだが
和平交渉する気にもならない質のものだ。
稀にしかないのだが 彼女が誓をたてるときがあれば
私が それを検閲しながらも 私は 何も言わず
また 彼女のオウム返し of 詰問にも 黙って耐えるのだ。 275
私は この精神を 学識ある教師や古代の聖者たちの

³⁶ [訳注] 原語は “Croesus”: クロイソス (?—546BC; Lydia の最後の王 (560-546BC) :
Babylon, Egypt と同盟 : 巨大な富を有していたと伝えられる) (『新英和』)

書物のページによって 飾って来た。

しかし この細身の身体は 床屋の技術をもっても

仕立て屋の技でもっても 美しくはならなかった。

それゆえに 私の形姿は 町や村のあらゆる人々にとって
一つの冗談の種だった。 280

しかしながら このことで 私の感情が害されたわけではない
彼らの微笑には 私は 微笑で応えたものだ。

そして 彼らの無邪気な嘲笑に対しても

馬鹿みたいに しっぺ返しをする訳でもなかったのだ。 285

従って 我がドリーの衣裳は 素晴らしかった

しかし 私の着るものには 全然関心がなかった。

それゆえに あらゆる安息日には

華やかな礼服を着て 姿を現し

座席に座っては 己れの容姿を展示したものだ。 290

そして 私の黒い上着が殆ど茶色になるまで

彼女は 私に 町を歩かせたものだ。

しかしながら それでも 彼女は (決して否定はすまい)
有名人の精髓みたいな女性であった。

彼女は 金銭を蓄えるために 必死に努力した。 295

そして 恐らく自分自身を例外として

(賭けて誓って 強く信じるのだが)

いかなるものよりも この私を愛していたのだ。

「耐えよ 控えよ」—それは (今まで考えてきて またそう言ったように)
牧師のあらゆる仕事の一部なのだ。 300

彼が 他者に説教するときには

己れが範例となって 教示しなければならない。

嘲る者が通り過ぎる時にも いつでも

私は 怒りの目を 彼に向けたことはない。
私が富者の酷評の種になったとき— 305
些細な誇りが 嘲笑を解き放ったときも
私も 必ず その冗談に加わって
古典的なものの蓄えで その負債を完済したものだ。

聖職禄と三度の収入で
それ以上は太れないほどに太った我が副祭司が 310
かつて 私に告げた。「あなたが ズボンのポケットに
「たっぷりと お金を入れておられるならば
「すぐに それで 手触り豊かな品物を生み出さない
「さもないと 重みでズボンがはちきれますよ」と。
おお 何と卑しい 不愉快な喜びでもって 315
彼は 私の貧乏暮らしを 嘲ったことか。
しかし 私は 彼の顔に唾を吐きかけて
私の衣服を 汚したくはなくて その代わりに
セント・ポール寺院から ギリシャ語で答え
彼に プリニウスの中に 次の引用文を探すよう 320
命令した— 「財布を自慢する野獣が
「領いて同意をした時には」—そして黙っていた。

ほれ あそこの 美しい家に住む 油商人を見たまえ。
妻の紋章盾を自慢している あの男だ。
彼は 商売を止めるや否や 325
我が閣下に裏切られた ある偉大な貴族の
貴婦人に仕えた ある女中に恋をした。
ヒュメーンやしろの社に その美女を連れてゆき
己れの寝室の半分を 権利として彼女に与えた。
彼女は まるで 自分の料理人仲間であるかのごとく 330

多くの公爵夫人のことを 噂した。

彼は かつてこう言ったものだった。「博士様 お分かりですかな？

「あなたのご家庭の血統図でも お聞きしたいものですな。」

私は 適度の畏敬の念をもって 答えた。

「私は偉大なる家系とは 契を結んでいないのだ。 335

「しかし 私の祖母が 言ったことを覚えているよ。

「(尤も 彼女は 身分が高かろうが 低かろうが

「(誰でもが 行かざるを得ない場所へと趣いて

「(長い歳月が経過してしまったのだが)

「私の祖先たちのうちのどなたかが 340

「昔々 名のある地位を 持っておられたとのこと。

「その先祖は あるロンドン市長に仕える

「執事あるいは徴発官あるいはラッパ吹きだったとか。

「その時は カルタゴ將軍ハンニバルが

「ロンドン市庁で 閣下と夕食を共になされた時だったとか。 345

「彼こそ ローマ法王の命で

「訪れることを義務づけられた 偉大なる軍人一

「その目的は かの青ざめた 真紅の薔薇をいただく

「諸家の間の 争いを終わらせるためだったと。」

油商人は言う。「そうだったかもしれませんが 350

「なにせ 気を絶する 昔々の物語—ですな。」

このようにして 私は この馬鹿者共に突きを食らわし

彼らの嘲りを 冗談でかわすことにしているのだ。

その血が 横柄さで沸き立っているような

そんな輩には 常識など通用する筈がない。 355

もし 私が 出会う馬鹿どもを鞭打つことになろうとも

私は 大通りに出かける気にはなれないし

また この髭面を お喋り好きな散髪屋へと

突っ込ませる気も さらさらないのだ。

「耐えて 慎めよ」— それが 過ち多い人間が 360
かつて知りたる 誠の金言なのだ。

しかし 事態は変わりつつある。新たな情景が現れ
我が精神は 慰みを得 また 心は元気づけられる。
我が運命を司る諸権力者が 私を見守り
我が忍耐にも その報酬をお与えになる。 365

しかしながら 人生の粗悪な道路を歩むうちに
また その前触れさえも示さずに
艱難が 我が住処を訪れているうちに
我が苦勞も止み 事態も好転するだろう。
私は この天のご配慮に額づきながら 370
そうだ このように 煙草を吹かすのだ。

おお 素晴らしきパイプよ 汝 悩みを寄せ付けぬ者—
安楽な 我が椅子の 愛しい仲間よ。
冷たい ストア派の技で 心を固めるために
作られたのではなく 心を癒すために 作られし物。 375

ストア派の哲人たちの いかなる者よりも
遙かに賢明だった ベイコン卿は
焦燥する魂の 激しい衝動を抑制する
そんな汝の力を 賞賛したものだだった。
また スウィフトもこう言った (人間的な名声が蔓延する 380
(この大きな天球における 何たる壮麗な名前であることよ)

「毎日 二本のパイプを吹かす者は
「歯痛も持たず 腹痛も起こさない」と。
静謐な 冷静な態度でもって こうしていれば
我がドリーの声音も もはや 耳障りでもなく 385

彼女が 例え 怒鳴っては冷笑する意図があったとしても
 もやは この耳には 優しい抑揚でしか入って来ない感じがするのだ。
 静かなる^{コンテンプレーション}瞑想は 煙草よ 汝こそが齎^{もたら}してくれる
 そして穏やかな乙女^{フィロソフィー}一哲学が。

そなたが導く 思索の森へと 390

この胸が十全に満たされるまで 誘われながら
 そうして 我が書籍は すべて書棚に眠らせて
 このように 私は己れ自身と心を通わせるのだ。

かように 一人ごちで 思索を繰り返し
 偉大なものに関する 教訓を垂れ 395

そうして 凡ゆる利己的欲望を押さえて
 善良なるものの感覚を 賞味するのだ。

おお 汝 私がそなたの麗しき息吹を吸い込む時に
 傍らで ビールが喝采の声を上げているのが見える
 慈悲深き液体よ。忘却の河の流れよ。 400

優しく忘却を招く夢を 誘い招くものよ。
 それは心を新鮮なものにしながら 戻り来る苦しみの
 限らない重みを 耐えさせてくれるのだ。

^{プライド}傲慢の放蕩息子たちには バッカス祭の快樂のなかで
 一夜を長引かせるよう させておけ。 405

私は 彼らの愉快な騒ぎを羨むものではないし
 彼らの陥落と 狂った不摂生の快樂を 羨みもしない。
 スペインが自慢する 甘美なワインも

ルシタニアの浜辺で育つ 風味のあるワインも
 我が盃を満たしたことはない。おお 神聖なる食事よ。 410

家庭で作る飲み物こそが 我が飲み物なり。
 そのようにして 今よりは幸せな日々しか来ないと期待しながら

激励を受け 私の唇は 感謝に満ちて 汝を祝福しよう
おお 煙草よ 逆境にあっても いかにか 私が
汝の力に慰められては 心が安らいだことか。 415
そして 私の不幸なる定めが 良い方向に向かうときには
友人のことなども 決して忘れはすまい。
そうなのだ 誇り高き司教冠が この額を飾ろうと
今と同じく 私は煙草を吹かすであろうよ。

おお 素晴らしきパイプよ 汝 悩みを寄せ付けぬ者— 420
安楽な 我が椅子の 愛しい仲間よ。
輪をなす紫煙が 舞い上がるとき
それは 私の感謝の気持ち
善なる者の^{ザ・グレイト・ファーザー}偉大な父に捧げる
上昇する^{サクリファイズ}生贖の品のように思われる。 425

更に多くのことを彼は語った。しかし 見よ 奥方殿が
約束していた豚の臓物を持って やって来たではないか。
シntaxは その肉に祝福の祈りを与えんと
席に座り その豪華なご馳走を食べにかかった。
「いいかい お前」彼は言う。「このご馳走は 430
「私には ブルゴーニュ産のワインくらいに美味しくなるだろう
「もし 私たちが 最後に抱擁を交わして以来
「お前の周辺で 何があったかを 教えてくれたらね。」
「おお」彼女は答える。「最愛のあなた。
「万事が 普段通りでしたよ。ちゃんと順序よく・・・ 435
「この美味しいレヴァーを どうぞ一切れ ご賞味ください。
「教区牧師様は 相変わらず 誇りがお高くて・・・
「あなた これもそちらも 切って差し上げましょうか。
「その赤身に 油をかけてさしあげましょう。

「あの油屋さんの奥さんですけどねえ 私がこのドレスを着て 440
「最初に彼女に会ったとき 彼女は大きく動揺すると思っていました。
「そんな様子を 彼女が見せたのは 教会の中ででした。
「私の帽子が 彼女のお祈りの 邪魔をしたのですわ。
「あなたのナイフは切れ味が悪いようですね。これでお研ぎなさいな。
「切りを深く入れて！ その内臓には感覚はありませんから。 445
「あの弁護士のグラスパルさんですが あなたもご想像いただけるように
「偽証罪で 大きな罰をお受けになったとか。
「弁護士さんの骨が語るように いわば
「正直肉屋が 彼を 罰したみたいな形ですね。
「彼は 牛肉の塊を 自宅に運ぶよう 注文したそうですが 450
「いざ 家に届くと 空腹のその泥棒が
「肉切れの一、二ポンドを 削ぎ落としたのですが
「それを返却したとのこと それだけでは十分ではなかったからだそうです。
「そしてその詐欺行為が暴かれ 言葉が発せられると
「打擲が そのあとに続きました。 455
「その時に まさに彼に相応しいのですが その罪人は
「夕食ゆえに たっぷりと打ちめされたとのことです。」

シンタックスは言う。「もし私に息子がおればなあ」—

「お黙り遊ばせ！」奥方は答える。「だって あなたは なさらなかつたもの
「思うに 今だって
あなたは少くくは お出来きになられる筈ですよ。 460
「ですから 私 それに関するいかなる弁解も 許しませんからね。
「二人が一緒になってから
「お互いの顔にまみえて以来 随分と長い時が過ぎましたわ。
「言うまでもなく この私めは あなた様の食欲を減じさせるような
「そんな不細工な女ではないと信じていますが。」 465
「しかしねえ」と博士。「もし 男の子が

「愛しいドリーよ 我らの喜びの仕上げとなるとしたら
「その子が若者となるや否や この恐ろしい^{アドヴァンシティ}苦難の
「後継者になるが早いかな 同様に恐ろしい^{アターニー}弁護士職が
「彼を縛り付け 確実に^{オールド・ニック}悪魔の餌食となるような 470
「そういう運命に陥るのが 見えるようだ。」
奥方は 付け加える。「そうですね 素足のままに
「その子が 大通りを歩くのが 見えますわ。
「でも 今のところ あなたの痲癩玉が破裂する前に
「まずは そのガキっ子とやらを 持ちたいものですわね。」 475

博士は 陽気な彼の妻が 生涯において
このように美しく見えたことは これまでになかったと思った。
彼女の声も うっとりさせるほど 甘くなると そう思い
そのことが 彼には 何よりのご馳走に思われた。
余りに調子が整った声ゆえに その声が 480
歌いながら 優しく震えるのを 聞きたくて仕方がなかった。
「さあ ここへ来て歌ってくれないか そして慰めておくれ。」
奥方は ただニタリと笑いながら 従うだけだった。

歌

急いでドリーのもとへいらっしゃい さあ！
今日は あなた様とヒュメーンの日 485
女神に あなたの愛の絆を 結ばせたまえ
女神に 愛の儀式を 準備させたまえ
妖精たちに 沢山の花輪でもって
聖なる婚礼の部屋を 飾らせたまえ
そこへ 愛らしき美女を 導いて 490
キューピッド様をも 招きましょう。

今日は あなた様とヒュメーンの日
急いでドリーのもとへいらっしやい さあ！

時間はこうして過ぎていった。翌朝が来ると
シンタックス婦人に 変わりりはなかった。 495

しかし (このことは以前にはなかったこと)
博士が その胸に抱いている希望すべてを打ち明け
物語を語り終えた時に
喜びと 虚栄心に圧倒されて
彼女は 愛情溢れる抱擁を 繰り返した。 500

博士はどうかと言うに 同様に喜び溢れ 愛情深くキスをした—
固められて ^{こぶし}拳となつては しばしば 彼の目と鼻を背けて
強力な一撃をうまくかわさざるを得なかった
その当の彼女の両手に。

そうしながら 金色の安楽に囚われて 505

怒りの言葉も 響め顔も 彼を悩ましはしなかった。
二人の まさしく変化した人生を 家庭内暴力などと言う
そのような兆候が かき乱すこともなかった。
というのも 奥方は かの油屋の女将よりも着飾れたのだし
博士は 彼の慈善の扉を求めてやってくる 510
貧困者たちを 今や 救済できる見込みがたったのだから。

世間様は 数ある美德には しばしば盲目なれど
富に対しては 常に 優しく接するものなり。
と言うのも 見よ！ ^{ミストレス・フエイム}名声女王様と呼ばれ知られている
あるお喋り貴婦人が 515

その国じゅうの人々に こう告げていた。
「シンタックス博士は 彼が書いた その学識豊かな書物を売って

「千ポンドのお金を 稼ぎなされた。

「今や 博士は 諸貴族にも愛される

「著名人となられ 人々は 何としてでも 520

「息子たちを 弟子にして頂きたいと考えている」と。

言葉を継いで言う。「それゆえに 博士が出かけるころは何処でも

人々は 博士の人格に 敬意の念を表明していますし

また 他方で 近隣の田舎郷士の全てにとって

将来性のある我が息子たちを 彼のもとに派遣して 525

シントックス博士のご加護なる名誉に預からせること—

それが 彼らの切ない願望となっている」と。

しかし これらの見通しにも やがて 終止符が打たれた。

ある友人からの 一通の小包が到着した

ケッジックの緑豊かな 森林の多い山の斜面に住む 530

かのワーズィ郷士からのものであった。

郵便夫は 怪訝そうな顔つきで 通り過ぎながら

そのことを 町じゅうに知らせて回った。

そのような手紙は 彼の巡回範囲では

これまでに見られることがなかった そんなものだったから。 535

いいや 郵便条例によって その手紙は

優に七シリング以上の料金でもあったから。

博士はそれを凝視する—奥方は 気が進まぬながらも

儂い定めシリング貨幣を 一枚一枚 緩やかに取り出しながら。

「お前の銀貨のことは 気にするでないよ。」シントックスは言う。 540

「可愛いお前。郵便屋さんに支払いなさい。

「さてさて この手紙の内容を見るにつけ

「その重さは 金貨に値するような気がするよ。

「さあ こちらへ来て さあ お座り。

「そして 私が今から読み上げることを 注意して 聞くのだよ。」 545

愛する尊師様

我らの司祭が亡くなりました。

そして 彼の代わりに あなたを指名させて頂きました。

しばしば 私は 彼の首が砕けたらいい

酔っ払って 池にハマリ込んだらいい そう願っていました。

そうしたら (是非お知らせしたい点ですが) 家屋に押し入る獵犬が 550

その願いを果たしてくれました。彼は 溺死したのです。

説教にも また祈祷にも 彼は相応しい人物ではなく

ただ単に 棍棒を振るだけが 彼の長所でしかなかったのです。

そして 彼は 祈りを唱えるのにも優って

野兎を捉えるために 罾をしかけることを好んでいました。 555

どうぞ いつかのお約束を守らせてくださって

この教会へと どうぞ いらして頂けませんか。

凡ゆる法的な行為と活動にかけて

ヘヤブレイン牧師の後継者となって頂きたい。

今 あなたがお受け取りになる書類は 560

正当な しかも十全たる所有権を与えるものであります。

どうぞ 尊師様 一年に三百ポンド以上で

生活を スッキリとなさってください。

そして もし あなたが 私の息子の学問に

お付き添いくださいますならば 565

また もし 彼の勉学の時間をお導きくださいますならば

それに加えて 更に五十ポンドかそこらを 上乘せ致しますよう。

いいえ それよりも あなたがこちらへいらして

この教区を 活気づけて頂けたらと望むものです。

私の娘も そしてその妹も 一緒になって 570

私のこのご挨拶に 感謝しつつ 意志を共にしております。

あなたのお祈りに対して 私も加えていただけますようー

あなたの忠実な あなたを賞賛してやまぬ 友人

ジョナサン・ワージーより

奥方は 大きな叫び声を上げる。「何と素晴らしいお方！」

「この喜びを どのように表現したらいいのでしょうか!」 575

「これこそ 私が願う最高のものですわ。

「ワージー郷士こそ 価値ある郷士なり³⁷ でしょうか。」

「ははは」シントックスは言う。「何と愉快なことぞ！」

「ドリーめ 素晴らしいダジャレを言ってくれたね。

「でもね そのダジャレは 私は嫌いだね。 580

「まったくつまらない 取るに足りない空世辞になってしまうよ。

「どんな頭の悪い連中でも それくらい完全に理解するだろうからね。

「でも お前が^{まじ}巫山^{まじ}戯て ダジャレ遊びをするのも 尤もだ。

「多分 今日 は もう教室で教えることも出来ないだろうし

「子供たちには 外へ出て 遊ぶよう 伝えてくれないか。 585

「神様 有り難や。もう 労苦と面倒事は 過去のもの

「我が休日が 遂に訪れたって ことだな。」

こうして 遂に 彼ら二人は 多忙な学校を放棄し

如何に生きるかという大きな悩み以外に

殆ど何も与えなかった場所を 590

喜んで 後にする決意をしたのだった。

そして 長の旅の準備をするために

シントックスは 一頭だての馬車を購入し

灰色の馬のための馬具をも 準備した。

³⁷ [訳注] この一行は、日本語では訳すのが難しい掛詞が使われている。原語では“Squire Worthy is a worthy Squire”となっている。

ラルフも 主人との別れが嫌で 595
 博士の書物と家財道具を
 奥方の衣裳と一切合財を運ぶ 旅行車のそばを
 歩いてついてゆくことにしたのだった。

料理人のメイドも 荷物の上に乗っかかり
 重たい荷物に 更に目方を付け加える。 600
 彼女は おお優しきメイドよ ラルフの行先はどこであれ
 完全に ついて行く気になっていた。

博士は 町人たちに 「お別れ」を言う日を告げるために
 歩き回って 過ごしたのだが
 以前は 彼の扉に敷居を跨ぐことさえ 605
 軽蔑していた 彼らは
 シンタックスが 最後の別れの宴を催す段になると
 その同じ扉を求めてやって来ては 飲めや喰らえやの大騒ぎ。
 博士の偉大さとその価値を 未だに知らない隣人たちは
 彼が不在になることだけを 残念がった。 610
 一方 奥方は これまで町じゅうで 褒めそやされる言葉のひとつも
 発せられなかったのだが 今や
 穏やかな気質の 顔つきは勝ち誇った様子の
 最も快活な貴婦人となっていた。

長い歳月のあいだ 彼の誕生日を祝うことさえ拒絶していた 615
 鐘突き職人たちは 悲しみ溢れる情熱で
 その鐘を突いて 押し黙った
 嘆きのこもる 轟きの音を響かせた。
 そうするうちに 軽やかな心を持って 博士と その妻が
 出立する日が やって来た。 620
 そして 旅を続ける最中で オックスフォードに寄り
 かの若き日の友 かの親切で
 学識豊かなディッキー・ベンドと

一日を過ごすことも 忘れはしなかったし
また かのクリスチャン司祭を再訪し 625
彼の家の屋根の下で 一夜を過ごすことをも
旅の遅延とは見なさなかった。
また 加うるに 昔の交誼を感謝して
ドリー自身が 挨拶をすることも 禁じえなかった。
ヨークでは 丸一週間ほど ハーティ郷士の 630
パーティをも 楽しませてもらったのだった。

それから二、三日経つと おお 見よ！ 湖水地方が
眼前に 恍惚とさせる光景を 煌めかせているではないか。
すると 東となった木々の間にそびえ立つ
己れの聖なる建造物を 目にする。 635
その塔は 古代の誇りを身につけて
傍らの 暖かい牧師館を伴って 姿を現した。
「おお 遂に 愛する妻よ」彼は叫ぶ。「我らは
「指定された 静謐な住まいへと 到着したのだ。」

慇懃な人々が 列を作って迎え入れ 640
素朴で教養はないながらも 敬意の気持ちを表してくれる。
群れ集う群衆の 最前列には
肥った税金担当官が現れて 恭しく頭を垂れる。
「ようこそ サマーデンへ」と彼は言う。
事務官がそばに立ち 「アーメン！」と叫ぶ。 645
グリズルは 親切な郷土と貴婦人たちが待つところへと
大胆にも 門を通り抜けて 走って行った。
彼らは 心と手とを結びあわせ 優しく抱擁しながら
喝采して カンバーランドへと 迎え入れてくれたのだった。
鐘が大きく鳴らされ 少年たちが万歳の声を上げる。 650

かがりび
篝火も 順序よく炊きつけられ

村人たちは 熱狂のなかにいた。

そうして ビールと爆竹が その日を閉ざした。

全員がもてなしてくれたゆえに シンタックスは
学識ゆえの安楽を 時間いっぱい愉しんだ。

655

同時に 彼は より明るい世界へと 道を示すための
説教と 祈禱を行うことを 忘れはしなかった。

そして 愛する妻も 不機嫌な態度を示したり
癩癪玉を破裂させるような そんな光景も見られなくなった。

更には 忠実なグリズルは もはや

660

馬車を引いたり 人を載せたりすることもなくなった。

かくして 善良な**牧師**と その**妻**と そして**愛馬**は 共に
快適極まりなき生活を送った・・・とさ。



(完)

The Tour of Doctor Syntax in Search of the Picturesque: Illustrated with Original Designs

William Combe

Nabu Public Domain Reprints:

You are holding a reproduction of an original work published before 1923 that is in the public domain in the United States of America, and possibly other countries. You may freely copy and distribute this work as no entity (individual or corporate) has a copyright on the body of the work. This book may contain prior copyright references, and library stamps (as most of these works were scanned from library copies). These have been scanned and retained as part of the historical artifact.

This book may have occasional imperfections such as missing or blurred pages, poor pictures, errant marks, etc. that were either part of the original artifact, or were introduced by the scanning process. We believe this work is culturally important, and despite the imperfections, have elected to bring it back into print as part of our continuing commitment to the preservation of printed works worldwide. We appreciate your understanding of the imperfections in the preservation process, and hope you enjoy this valuable book.